
銃剣使いとしてネギまへ

チェシャ猫もどき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銃剣使いとしてネギまへ

【Nコード】

N9768V

【作者名】

チエシャ猫もどき

【あらすじ】

どこにでもいる普通の高校生の小野寺おのの響ひびきはある日、通り魔によって殺されてしまう。そして、死神によってヘルシングのアンデルセン神父の力を貰いネギまの世界に転生する。

プロローグ

「君って運がいいね。こんなことって中々ないからね。」黒いローブを着て大きな鎌を持っているガイコツ、俺の考えが正しければおそらく死神は俺にそう言った。

俺はおのてい小野寺 ひびき響高校三年の18歳のしし座、血液型はA型、家族構成は両親に二人の妹がいる。

趣味は、おっとすまない話が逸れたな。

とりあえず、話を戻そう。俺はその日の夜、急に小腹がすいたから近くのコンビニまで買い物に出かけたんだが、前から来た男に包丁で腹を刺されてこうして倒れている。

死神の言う通りこんな体験はなかなかできない。
だが、運がいいとは思わない。むしろ、悪いから今こうして死にかけている。

そんなことを思っていたら死神は鎌を振り上げて「とりあえずさ、話があるからはやく死んで。」

そう言って鎌を振り下ろした。

1話

こうして、死んだ（殺された）俺は体から魂が抜けて今は、地面に倒れている自分の身体を見ている。
腹から大量の血が流れている。

何故、こんなことになったのだろう。

何故、こんな夜中に歩いてしまったのだろう。

悔やんでも悔やみきれない。

父さんと母さんには育ててもらったのに恩返しも出来ていない。
妹達とはもっと遊んであげればよかと緊張感のない声が聞こえてきた。

そういえば死神の存在をすっかり忘れていた。

死神は俺が泣き止んだのを確認すると相変わらずの軽い口調で話出した。

「とりあえずご愁傷様 a n d おめでとぅ。」

「おい、ご愁傷様は分かるけど、おめでとぅってのはどういことだ。」

俺の疑問は当然だろう。

なんせ死んでしまったのだ、おめでとぅはないだろう。

「そういえばそうだね、とりあえず君、転生できるから。」

「転生！？なんで俺が転生なんてできるんだよ。」

「え〜と、この地球上では今も沢山の人が死んでいつてるでしょ〜。その数が君でちょ〜ど100万人だったんだ〜。それで、祝100万人記念ってことで〜君は転生できるってわけ〜。いや〜タッチの差ってやつでね〜、もう少し死ぬのが遅かったら他の人だったんだよ。本当に君はついてるよ〜。」

「もつとも最後はお前に殺されたけどな。」

「あつ本当だ。」

まあ、気にするな。笑つとけ笑つとけ。
ハッハッハッハッハ。」

「オラア。」

腹が立つたので一発殴っておいた。

「転生するにあたって何かひとつ能力がもらえるけどどんなのがいい〜?」

何事もなかったかのように言ってきやがった。
それにしても能力ね。

少しの間考えて死神に言った。

「ヘルシングのアンデルセン神父の能力がいい。」

「おっけい。」

それじゃあ、いっておいで〜。」

そう言っただけ死神は俺に鎌を振り下ろした。

「そういえば、ネギまの世界に行くんだってこと伝えてなかった。まあ、いつか。」

笑っつけ笑っつけ。

ハッハッハッハッハ。」

暫くの間死神の笑い声があたりに響いていた。

2話

死神によってアンデルセン神父の能力をもらって、転生した俺だったが、能力が使えるのかどうか確認をした位で、日常生活で使う機会は全くなかった。

今思えばもつと他の能力にしておけば良かったのかもしれないが、今更どうしようもないし別に困らないので、気にしていなかった。

しかし、俺が中学を卒業した日、夜中に物音が聞こえた。

なんだろうと思って物音のする方へ行ったら、俺の両親と知らない男がいた。

それだけなら良かったが、両親は血を流して倒れていて、男は血のついた包丁を持っていた。

普通ならここで叫んだりするのだろうが、俺はいたって冷静だった。一度死んだことがあるから耐性でもついてしまったのかもしれない。

そんなことを考えていたら、男が何か言いながら近づいてきた。

俺を殺すのだろう。

普通ならここで殺されるのだろうが俺にはアンデルセンの能力がある。

俺は銃剣を男に投げた。

銃剣は男に突き刺さり、男は死んだ。

俺は人を殺した。

その翌日、俺は警察に事情聴取を受けた。

俺の両親は死んで、犯人にいたっては銃剣が刺さって死んでいたのだから。

俺は能力のことは言わなかった。

例え言ったとしても信じるとは思えない。

むしろ、信じる方がおかしいだろう。

なので、俺は両親は男に殺され、男と銃剣については分からないと答えておいた。警察は、はじめは俺を疑っていたようだが、すぐに俺は解放された。

両親の葬式は事件から数日後行われたが、俺を引き取ろうとする人はおらず、俺は住んでいた町を、16年間住み続けた町を飛び出した。

俺は裏で世界中の犯罪者を殺したり犯罪組織を壊滅させたりしていた。

俺は転生前は通り魔に殺されたし、転生後は両親を殺されたので犯罪者達に復讐をしたいという気持ちがあったから。

しかし、裏の世界で驚いたのは魔法が存在しているということだった。

漫画やゲームでしかありえないと思っていたが、裏の世界ということで納得しておいた。

魔法があるということは魔法使いもいるということで、俺も魔法使い達と戦うことはあったし、殺されかけた事など何度もあった。

それでも生きているのは、アンデルセンの能力があったからだ。

銃剣はいくらでも出せるし、銃剣を投げたときの威力は凄まじい。

再生者の能力でほとんどの傷は治り、聖書による転移で追われる事も少なかった。

そうしては両親が死んでから10年目の春、俺は両親の墓参りのために日本に帰っていた。

俺の大切な両親の命日なので、この日だけは毎年欠かさずいる。

両親の墓参りが済んだので、次の目標について考える。

情報が正しければ、たしか麻帆良に潜伏しているはずだ。

俺は着ている黒のロングコートの懷から聖書を取り出し開く。

ページは勢い良くめくれながら宙を舞う。

ページは俺を中心に回っていき俺を包み込んだ。

そして、俺はその場から消えて、宙を舞っていたページは青い炎を上げながら燃えてなくなった。

主人公設定

主人公

小野寺 響（おのでら ひびき）

年齢 26歳

血液型 A型

身長 190

体重 89

家族構成 転生前 父母 妹が二人

転生後 父母

趣味 読書

好きな物 子供、小動物

嫌いな物 犯罪者

服装、黒のスーツに黒のロングコートをいつも着ている。
ちなみにコートは同じのを何着も持っている。

能力

ヘルシングのアンデルセン神父の能力

銃剣

無限に出せて銃に取り付けずに手で持つて戦う。
柄の部分に火薬が仕込んであり、相手に投げた後爆発させることも可能。

祝福儀礼が施されているので、人外に対する威力は高い。

爆導鎖

鎖に等間隔に銃剣が取り付けられている。

この銃剣の柄にも火薬が仕込んでいるが、銃剣に仕込んでいるのは種類が違う為爆発の威力は銃剣よりも高い。

聖書

この聖書を開くことで、転移したり結界を発動させたりできる。
この小説では転移は一度行ったことのある場所にしか行くことができないう設定。

エレナの聖釘

自分の心臓に突き刺しことで茨の化物になることができるが、主人公は使う気はない。

再生者（リジェネレーター）

たいていの傷は負っても治り、頭に銃弾を受けても致命傷にはならない。

ヘルシングでは生物工学の粋を凝らした技術とあるが、主人公は特殊体質ということにしている。

ちなみに主人公には魔力がなく、気を扱うことも出来ない。

説明

この主人公は転生前は通り魔に殺され、転生後は両親を殺されているので、犯罪者をひどく憎んでいる。何故、死神にアンデルセンの能力をもらったかという点、以前ヘルシングの漫画を読んだ際アンデルセンのインパクトが強烈で、能力を考え出した時に真っ先に思い浮かんだからである。

犯罪者や犯罪組織を相手に10年間も戦い続けているため、裏ではかなり有名。

3話

夜の森に、多くの昔話に登場し、ある者はその存在に恐怖し、またある者はその圧倒的な力を信仰さえした化物達がいる。

その化物の名は鬼。

その鬼達と戦っているのは、たった二人の少女。

ひとりはいサイドテールの髪で巨大な野太刀を振るい鬼達を斬っている。

もうひとりは褐色の肌にストレートロングの髪で、二丁の拳銃で鬼達を撃ち抜いていく。

しばらくの間、少女達と鬼達は戦っていたが鬼達の数はいだいに減っていく、そして最後の一体が少女に斬られて、森に残っているのはふたりの少女だけだった。

「化物相手にたった二人で実にお見事。」

そんな声が聞こえてくるまでは。

SIDE 刹那

私と龍宮は今日も関西の魔法使いが送ってくる鬼達と戦った。特に苦戦することもなく、全ての鬼を倒して、あとはあたりに敵がないのを確認し、このことを学園長に報告するだけだったが、

「化物相手にたった二人で実にお見事。」

そんな声が聞こえてきた。

私と龍宮は声のする方を見ると、そこにいたのはスーツを着たひとりの男。

「そう睨まないでいただきたい。

私の名前は吉良 義弘（きら よしひろ）ただの人形師です。

お二人の戦いを拝見しましたが、その若さで実にお強い。おまけに美しい。

そこで提案なのですが、お二人は人形になるつもりはありませんかな？

その美しさとその強さを私の手によって永遠の物にしてさしあげましょう。」

「私にはお嬢様をお守りするという大事な使命がある。

貴様の人形になるつもりは毛頭ない。」

「私も同じさ。

永遠なんて物には興味はなくてね。

私たちの前に現れたんだ、大人しく捕まってもらうよ。」

そう言って私は夕凧を龍宮は拳銃を構えた。

吉良はたいして気にすることもなく、

「そうですか、できれば傷を付けるようなマネだけはしたくなかったのですが、しかたありませんね。」

では、私の人形の素晴らしさを教えてさしあげましょう。」

吉良はそう言って指を鳴らすと、二つの魔法陣が現れ二体の人形が召喚された。

一体はメガネをかけ、髪は肩まで伸ばしていて、二丁の拳銃を持っている。

そして、もう一体はウェーブのかかった長い髪を腰まで伸ばしていて、こちらは日本刀を持っている。

「彼女達の名前は由美子と由美江。」

拳銃を持っているのが由美子で日本刀を持っているのが由美江です。

どうですか、美しいでしょう。

今からでも遅くはありません。

私の人形になりませんか？」

私と龍宮は何も答えない。

「そうですか。」

ならば、由美子さん由美江さん行きなさい。」

吉良がそう言い終わると同時に、二体はこちらに突っ込んでくる。

私と龍宮は左右に分かれて私が由美江、龍宮が由美子を相手にする。

由美江は突っ込んで来た勢いでそのまま私に斬りかかって来るが、動きが直線的で簡単に避けることができた。

由美江の背後に回り斬りかかったが、由美江の手首が回転して刀の刃をこちらに向け、腕を回して私の夕凧を防いだ。

防がれると思っていなかったため、若干動きが止まる。

由美江は首を回転させこちらを向くと口が耳まで裂け、大量の針を放った。

私は何とか避けたが少し喰らってしまった。

正直油断していた。

相手は人形、私たちにはできないような動きも出来れば、武器だつて仕込んでいるだろう。

私は気を引き締めて、夕凧を構えようとしたが体に思つように力が入らずに、夕凧を手から離してしまいついにはその場に座り込んでしまった。

「刹那何をしているんだ。」

龍宮が座り込んだ私に注意を向けた隙に由美子の口が裂け、龍宮に針を放った。

龍宮はそれを受けてしまい私と同じように、その場に座り込んでしまった。

「由美子さんに由美江さん、良くやりました。」

どうですか私の特製の麻痺毒は。

ほんの少し喰らっただけなのにもう動くことができないでしょう。」

何たる失態。

私が油断したばかりに、私はおろか、龍宮まで敵に捕らえられてしまう。

そうなれば、私と龍宮は人形にされ、私はお嬢様を守ることもできなくなってしまう。

そんな私を見て吉良は、

「そんなに怖がる必要はありませんよ。

すぐに、老いも病もない体にしてして差し上げますからね。」と楽しそうにそう言った。

吉良が私たちに近づくために歩き出そうとした瞬間、吉良達に銀閃が降り注いだ。

「くそっ」

突然の出来事に少し反応が遅れたが、吉良はそれを避けることに成功した。

しかし、由美子と由美江は反応が遅れてしまい、その銀閃をモロに浴びてしまった。

銀閃を浴びた二体は粉々に砕けてしまった。

他の魔法先生が助けに来てくれたのだろうか？

しかし、あのような攻撃をする人を私は知らない。

私が攻撃を加えた正体について考えていたら。

「これは銃剣、まさか。」そんな龍宮のつぶやきに答えるように何処からともなく、大量の紙が飛んで来て私たちの前で渦を巻き、そして、最後に紙が弾けたかと思えばそこには黒のロングコートを着た男がまるで始めからそこにいたかのように立っていた。

4話（前書き）

大幅修正しました。

4 話

S I D E 真名

私たちが先程まで戦っていた人形は、降り注いだ銀閃によって破壊された。

一瞬何が起こったのか分からなかったが、すぐに思考を戻して銀閃の正体を確認した。

そこにあっただのは人形の残骸といくつもの銃剣。

「これは銃剣、まさか。」

思わずそんなことをつぶやいたとたん、大量の紙が飛んで来て渦を巻き、弾けて一人の男が現れた。

刹那は突然現れた男に戸惑っているようだが、私はこの男を知っている。

その人の名前は小野寺響

その人は何人もの犯罪者を葬り、いくつもの犯罪組織を壊滅させている。

それもたった一人で。

かつて私も紛争地帯を渡り歩いていた時に何度か一緒に戦ったことがあるが、正直出鱈目だった。

銃剣を振るいながら銃弾の飛び交う戦場を駆け抜け、たとえ頭に銃弾を喰らっても再び立ち上がる。

彼が味方だったからよかったものの、敵として出会っていたら私は間違いなく殺されていただろう。

そんな彼だ、やられるはずがない。

私はそんなことを思いつつ、彼が戦うのを待っていた。

S I D E 響

俺の次の標的は吉良 義弘。

奴は多くの女性を殺し、その遺体を使って人形を作るという行為を繰り返していた。

そんな奴が麻帆良に潜伏しているという情報を掴んだので、聖書を使い麻帆良の森の中に転移したのだが、そこでは二人の少女が奴に襲われていた。

まさか、犯行が行われている時に転移するとは予想外にもほどがある。

少しどころかかなり驚いたが、そのまま襲わせる訳にはいかない。
俺は吉良と奴が召喚したであろう二体の人形に銃剣を放った。

吉良には避けられたが、二体の人形は破壊できた。

そして、俺は聖書を使い少女達の前に転移して吉良を見る。

「きいいいいさああああまあああああ！」

私の作品を！私の人形を！私の芸術を！

よくも破壊してくれたな！貴様はこの私自らの手で芸術性の力ケラ
もない糞のような死体にしてやる！！」

丹精込めて作った人形を壊されたのだから、奴の怒りは相当なもの
だろう。

しかし俺は銃剣を吉良に放つ。

「甘いわあ！」

吉良は両腕に仕込んでいた剣を出し、銃剣を弾くが俺は次々と銃剣
を吉良に放っていく。

「糞があああああ！」

うっとおしいわあああああ！

この虫けらがあああああ！」

吉良は放たれ続ける銃剣に痺れを切らしたのか、冷静さを失っている。
る。

俺はそんな吉良に1本の銃剣を放っていた銃剣より少し威力を高め

にして放つ。

吉良は右腕の剣で銃剣を弾こうとしたが、銃剣は吉良の剣を折って腕に突き刺さる。

突き刺さった銃剣の柄の先端から煙が吹き出し、吉良の右腕を破壊する。

俺は吉良に

「お前の右腕を破壊した。今からでも投降するなら命だけは助けやるが、どうする？」

と勝ち誇ったように言い放つ。

もちろん、まだ吉良に勝ったとは思っていない。

奴の冷静さを少しでも奪うために、言ってみただけだ。

それに奴は多くの女性を殺している。

仮に投降したとしても助けるつもりは微塵もない。

「虫けら風情がこの私を見下してんじゃないぞおおおお！」

吉良がそう叫ぶと、吉良のスーツが内側から裂け、新たに4本の腕が現れた。

「これで私の腕では5本だ。

貴様の腕はたったの2本。わたしが負けることはないわあ！」

今度は奴が勝ち誇ったようにそう言ったが、

「いや、お前の負けだよ。」俺はそう言って1本の銃剣を吉良の足元に放つ。

「ふん、何処を狙って・・・」

『いる』とは続かなかった。

何故なら俺が吉良の足元に投げた銃剣の柄の先端からは煙が吹き出していたからだ。

爆導鎖に取り付けられている銃剣に仕込まれている火薬は種類が違うので、爆発の規模や威力は高いのだが。

これらの銃剣に仕込まれている火薬では腕を吹き飛ばす程度の威力しかない。

しかし、吉良の周りには奴が弾いた銃剣が大量にある。

「ま、まずい！」

吉良はその場から離れようとするが、もう遅い。

銃剣は爆発し、周りの銃剣に引火して大爆発を起こす。

辺りは爆発で木々は折れ、砂煙が舞い上がる。

しばらくしてから煙が晴れると、そこに転がっていたのは胸から下を失い左腕だけを残して転がっている吉良の姿だった。

これだけの大怪我にも関わらず血を全く流していないのは、吉良自身も既に人形になっているからだろう。

俺は吉良に近づき吉良の頭に足を乗せ、ゆっくりと力を込めていく。

吉良が何か言っているようだが、無視して力を込め続ける。

吉良の頭の軋む音がしだいに大きくなっていくが、緩めることなく力を込め続ける。

吉良が何か叫んでいるようだが無視して力を込め続けていたら、「バキッ」という音と共に吉良の頭が砕けた。

俺は吉良が死んだのを確認して、二人の少女の方を向いた時、

「随分とまあ、暴れてくれたな侵入者。」

そんな声がしたので声のする方を向くと、そこにいたのは金髪で黒を基調とした服を着た少女と耳にアクセサリーの様な物を付けた緑の長い髪の少女がいた。

麻帆良の警備員の魔法使いかと思ったが、俺の後ろにいたサイドテールの髪の子が「エヴァンジェリンさん」と言った。

エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル

『闇の福音』と恐れられている懸賞金600万ドルの魔法使い。

「お前がエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルか。そうか、今日の俺はともっている。

『闇の福音』であるお前を殺すことが出来るんだからな。覚悟はいいかエヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。てめえは今日、ここで死ねえ！！」

俺はエヴァンジェリンとその従者に銃剣を放った。

5 話（前書き）

大幅修正しました。

5話

SIDE エヴァ

私は茶々丸の入れた紅茶を飲みながらくつろいでいると違和感を感じた。

麻帆良に侵入者が来たのだろう。

まったく、この忌ま忌ましい呪いさえなければこんな面倒なことをしないで済むものを。

「おい、茶々丸。さっさと行ってさっさと終わらせるぞ。」

「かしこまりました、マスター。」

私は茶々丸と向かっていると、反応のあった所で爆発が起こった。

くそっ 戦いが始まっていたのか、「急ぐぞ茶々丸!」「はいっ! マスター。」

私と茶々丸は速度を上げて爆発の起きた場所に急ぐ。

爆発の起こった場所に着くとそこにいたのは、同じクラスの桜咲刹那と龍宮 真名、そして黒のロングコートを着た一人の男だった。おそらく侵入者とあの二人が戦い、二人がやられたのだろう。

あの二人は麻帆良にいる魔法関係者達の中では強い部類に入る。

その二人がやられたのだ、あの侵入者の実力はかなりのものだろう。

このところ退屈していた所だ、久々に楽しめるかもしれない。

「随分とまあ、暴れてくれたな侵入者。」
私はそう言つと奴らの前に姿を現す。

私が来たのが以外だったのか桜咲が「エヴァンジェリンさん」と言つたが無視し男を見ていたが、

「お前がエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルか。
そうか、今日の俺はとてもついている。

『闇の福音』であるお前を殺すことが出来るんだからな。
覚悟はいいかエヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。
てめえは今日、ここで死ねえ！！」

奴はそう言つて銃剣を放った。放たれた銃剣は衝撃波を起こし地面を切りながら私達に向かつてくる。
私達はそれを避けたが、私は衝撃波により僅かだが傷を負ってしまった。

銃剣を使う奴は一人しかいない。

小野寺 響

『銃剣』『殺し屋』『リジェネレーター（再生者）』『殲滅者』

これらの多くの異名を持ち、単身で犯罪者や犯罪組織と戦い続けている男。

最悪な奴が来た。

他の奴なら力を封印されている今の私でもやられることはないだろう。

しかし奴は違う。

奴はたった一人で何年も戦い続けているのだ、今の私では勝つのは難しいだろう。

例え逃げたとしても、奴ならどこまでも追いかけて来るに決まっている。

相手は危険だがやるしかない。

「茶々丸！この男は危険だ、全力で行け！」

「かしこまりました、マスター。」

そう言つて茶々丸は奴に突っ込んでいく。

奴は茶々丸に次々と銃剣を放つが、茶々丸はそれをかわし、腕のバ
ーニアで加速させたパンチを放つ。

奴は銃剣を交差させ防ごうとするが、茶々丸のパンチは銃剣をたやすく折るとそのまま奴の腹にめり込んだ。

骨の碎ける音が聞こえ、奴は口から血を吐いたがすぐに茶々丸の腕を掴むと、

「いいパンチだ。」

と言つてニヤリと笑うと新たな銃剣を出して振るつた。

振るわれた銃剣は茶々丸の首を落とそうとするが、茶々丸は掴まれていた腕を切り離して銃剣を避ける。

しかし完全には避けきれなかったのか、喉に大きな傷を負ってしまった。

奴は避けられると切り離された腕と茶々丸を繋げていたワイヤーを切って、その腕を投げ捨てた。

「茶々丸下がれ！」

そう言って茶々丸を後ろに引かせると私は詠唱を唱える。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。」

私は触媒の入った試験管を投げつけると『凍る大地』と唱える。大地は氷で覆われ奴の足も氷によって固定し、身動きを取れないようにする。

そして続けて詠唱を唱えようとすると、奴は銃剣を足元に放つ。

銃剣は氷に突き刺さったが破壊するには至らなかった。

奴の悪あがきかと思ったが銃剣の柄の先端が煙を吹き出していた。

そして、銃剣が爆発し氷を破壊する。

奴は氷から抜け出すと距離を詰め私の首を落とそうと銃剣を振るう。その攻撃を避けようとするが間に合わない。

ああ、私は死ぬのか。

そんなことを考え覚悟を決めた時、

銃声が響いて奴の頭が撃ち抜かれた。

6 話（前書き）

大幅修正しました。

6話

SIDE 真名

やはりあの人は強い。

封印されていて力が完全ではないがそれでもエヴァンジェリンを倒せる人はそうはいないだろう。

それをあの人は殺す一歩手前まで追い詰めた。

実際、私が彼を撃たなければエヴァンジェリンは死んでいただろう。

彼はすぐに立ち上がり、

「これはどういいうつもりだ！龍宮 真名！！」

そう言いながら私に夥しい量の殺気をぶつけてくる。

私の全身は粟立ち冷や汗が止まらない。

刹那を見ると本人は殺気をぶつけられていないにも関わらず、顔が青くなっている。

私は出来るだけ冷静を装い彼に言う。

「久しぶりだね響さん。いきなり頭を撃つたのは謝るけど、どうして撃つたのかそのことも含めて説明するから戦いをやめてくれないかい？」

私は彼にそう提案してみる。こうでもしなければ彼を止めることは不可能だろう。

しかし彼は

「やめるだど！敵を！犯罪者を目の前にして戦いをやめる訳がねえだろうが！！」

彼はそう言い放つとエヴァンジェリンに銃剣を放った。

放たれた銃剣がエヴァンジェリンに当たる直前、銃剣が突然弾かれた。

「そこまでだよ。」

声のする方を見るとそこには私達の担任の高畑先生がいた。

タカミチ・T・高畑

かつて『紅き翼』の一人として活動し、今もNGO団体の『悠久の風』に所属しており、この麻帆良で学園長に次ぐ実力を持っている人だ。

この人なら響さんを止められるかもしれない。

私はそんな期待を抱きながら二人を見ていた。

SIDE タカミチ

僕が警備員の仕事を終えて帰ろうとした時、遠くで爆発が起きた。

あそこには龍宮くん和刹那くんがいたはずだ。

二人はあの年でかなりの力を持っているから大丈夫だとは思つが、彼女達は僕の生徒だ。何かあつてはいけない。

僕が二人の場所に向かつている時に銃声が聞こえた。

龍宮君が撃つたのだろうが、一度しか聞こえなかつたので、戦闘は終わったのだろう。

二人は無事だろう。そう考え安心していた。

「やめると！敵を！犯罪者を目の前にして戦いをやめる訳がねえだろうが！！」そんな言葉が聞こえてくるまでは。

彼が放つた銃剣のその全てがエヴァの命を奪おうと襲い掛かる。

僕は即座に居合拳で全ての銃剣を弾いたが、あと少しでも遅ければエヴァは間違いなく殺されていた。

「そこまでだよ。」そう言つて彼の意識をこちらに向ける。

どうして彼が麻帆良にいるのかは分からないがこのまま戦うのはかなり危険だ。

僕は彼と一度だけ戦つたことがある。

僕が犯罪組織のアジトに踏み込んだ時に彼と出会った。

彼はたった一人で組織の人間を皆殺しにしていた。

彼は僕と一緒に来た僕の仲間を組織の生き残りと思い攻撃を仕掛けてきた。

彼は戦いで魔法を使うことはなかった。

しかし、彼と戦う位なら魔法使いの集団を相手にする方がまだマシだ。

彼が放つ銃剣は衝撃波を起こし命を奪おうと襲ってくる。

彼はいくら吹き飛ばされようと、いくら骨を砕かれようと向かってくる。

正直言って恐ろしかった。

自分の方が勝っているはずなのに、次第に追い詰められていく。

結局は僕達が組織の生き残りではなく、組織と戦うために来たことを説明して戦いは終了した。

もしあのまま戦い続けていたら僕は殺されていただろう。

誤解が解けてからは彼とは仲良くやっているし、何度か一緒に戦ったこともある。

彼は敵には容赦しない。

そんな彼を止めるのは骨が折れるだろうがやるしかない。

「久しぶりだね響くん。」

そう言って僕は彼の前に立った。

7話（前書き）

大幅修正しました。

7話

SIDE 響

「そこまでだよ。」

その声とともに俺がエヴァンジェリンに放った銃剣が全て弾かれた。

「久しぶりだね響くん。」

その声の主はタカミチ・T・高畑。彼なら俺の銃剣を弾くことくらい容易だろう。

だが

「あなた程の人間がなぜ犯罪者であるエヴァンジェリンに味方する。答えるよ、タカミチ・T・高畑。」

俺は殺気を飛ばしながら彼を睨みつける。

タカミチさんは特に気にする様子もなく

「彼女は麻帆良の警備員で君は侵入者だ。

自分の同僚が殺されそうになっているのに黙って見ているというのかい？」

たしかに彼らにしてみれば俺は仲間を殺そうとする侵入者だろう。

しかし

「そんなことは関係あるものか。

犯罪者は殺す。

邪魔をするのならお前も殺す。

犯罪者の味方をするのなら誰であろつと殺す。

犯罪者には生きる資格も生きる権利もありはしない！」

銃剣を放つ。

それらは全て弾かれるが新たな銃剣を出し突っ込む。しかし腹に何
度も衝撃を受け吹き飛ばされる。

居合い拳を打ち込まれたのだろう。骨が砕けているがすぐに治る。

立ち上がり銃剣を放とうとした時、

「君はナギ・スプリングフィールドを知っているかい。」

そんなことを聞かれた。

思わず攻撃の手を止め答える。

「ええ、名前くらいなら知っていますがそれが何か。」

俺の返事を聞き、タカミチさんは嬉しかったのか少し笑みを浮かべ
て言った。

「そうか、知っているなら話は早い。エヴァは昔にナギさんと戦っ
て敗れてね。それ時に彼女は麻帆良に封印されたんだ。」

エヴァにとって麻帆良は自分を閉じ込めている牢屋。君にしてみれ
ば彼女が生きているのは気にいらないだろうけどね。」

説明を終えて俺をまっすぐに見つめる。

「君は犯罪者なら刑に服していても殺すのかい。」

「たしかに俺は捕らえられている奴を殺したりはしない。」

俺は犯罪者を絶対に許しはしないし生かしておくつもりもないが、捕まっている奴まで殺すつもりはない。

そんなことをしたって無駄だ。

「だが、軽過ぎる。600年も人を殺していた奴に対してそれは軽過ぎる。やはりこいつはここで殺す。」

再び攻撃の姿勢とる俺にタカミチさんは疲れたように言った。

「君がエヴァに対する刑罰が軽いという考えはよく分かった。

けど、僕にエヴァの罰を重くするような権限はないし、君がエヴァを殺すというならそれを止めなくちゃならない。」

そう言い終わると再び辺りに殺気が満ち緊張が走る。

俺が銃剣を放とうとした時

「そこで提案だけど学園長と話をしてみたらどうだい？このままじや僕と君は戦わなくちゃならないし、最悪どちらかが死ぬかもしれない。

だから麻帆良の最高責任者である学園長なら何らかの措置をとってくれるかもしれないよ。」

攻撃をやめて考える

エヴァンジェリを生かしておくのは些か不本意ではあるがこのままだと間違いなくタカミチさんと戦うことになる。

タカミチさんは手加減して勝てる程弱くはないし、本気で戦えば彼の言う通りどちらかが死ぬこともあるだろう。

ならば彼の提案をのみ学園長に何らかの措置をしてもらった方が圧倒的にいい。

「わかりました。俺を学園長の所に案内して下さい。」

「わかった。それじゃ案内するから着いて来て。

エヴァにも来てもらうけど、いいかい？」

「かまわん。このままでは私も危険だしな。」

エヴァンジェリンも来るようだ。

「それじゃあ龍宮さんと刹那くんはもう遅いから先に帰って休んでいてくれ。」

「あとのことは頼んだよ先生。」

「お疲れ様です。」

こうして俺は二人と別れ、タカミチさんに連れられて学園長室に向かった。

SIDE タカミチ

学園長室の扉をノックする。

「こんな遅くにすいません。報告したいことがあって来ました。」

「入ってくれ。」

学園長の言葉を聞いて扉を開けて部屋に入る。

「エヴァまでおるとは珍しいの。して、そこにいるのは誰かの？」

「はじめまして小野寺 響と言います。貴方に話たいことがあつて来ました。」

学園長は響くんの名前を聞いたとたん鋭い眼差しで響くんを見る。

「ほう、君がこのわしに一体なんの話かね？」

彼に戦う意思がないことが分かり警戒を緩めるが視線は鋭いままだ。

「それは僕から説明します。」

僕は学園長にどうして彼を連れて来たのかを詳しく説明した。

学園長は目を閉じ暫く考えて静かに息をはく。

「たしかに君の言う通りエヴァは今まで数えきれない人を殺しておる。」

エヴァに対する刑罰が軽いという考えも間違いではない。」

「ならばエヴァンジェリンの刑罰を重くするべきでは。」

「うむ、しかしそれは出来んのじゃ。」

学園長の言葉を聞いたとたん響くんから殺気があふれる。

「これ、そう殺気だつてない。人の話は最後まで聞かんか。」

響くんは少しばつの悪そうな顔をして殺気を消す。

「エヴァが麻帆良に封印されておるのは知っておるな。」

響くんは軽く頷く。

「エヴァはナギにかけられた無限登校地獄という呪いで15年間女子中学生として学園に通っておる。」

「無限登校地獄・・・なんだその呪いは・・・。」

響くんは少し呆れている。

「この呪いをナギの奴が膨大な魔力で出鱈目にかけてしまったの。誰にも解くことが出来んのじゃ。」

おまけに麻帆良は人材不足でう。

エヴァには警備員として働いて貰わんと困るのじゃ。」

「しかし！」

響くんはそれでも納得がいかないのだろう。学園長に抗議しようとするが、

「そこでじゃ！君には暫くの間麻帆良に滞在してもらいエヴァを監視するというのはどうじゃ？」

「エヴァンジェリンを監視ですか？」

響くんは予想していなかったのだろうきよんとしている。

「そうじゃ。このままでは話が進まん。君がエヴァを暫く監視し危険ではないと判断したら麻帆良から去る。もちろん衣食住はこちらで用意する。」

すまんが、これで精一杯じゃ。」

響くんは黙っている。

部屋が沈黙に包まれる。

学園長の言った案がおそらく最善かもしれない。
もし彼がこれを断れば彼と戦うしかないかもしれない。
僕は心の中で祈る。

1秒が1時間にも感じられる沈黙は

「わかりました。俺がエヴァンジェリンを監視し、危険ではないと判断しだい麻帆良から去るということだ。」
その言葉によって破られた。

「しかし、エヴァンジェリンが犯罪、もしくは一般人に危害を加えた場合は問答無用で殺します。それと麻帆良に来る侵入者。そして麻帆良の魔法関係者が犯罪を犯した場合も同様に殺しますがそれでもいいですか。」

僕と学園長はほっと一息つく。

「うむ。エヴァが一般人に危害を加えたら殺してくれてかまわん。侵入者と魔法関係者も同様じゃ。エヴァもそれでいいかね？」

学園長がエヴァに尋ねる。

「かまわん。封印されている今の私ではこいつには勝てんし、一般人に危害を加えるつもりもない。」

ほかの魔法使いどもがどうなろうと私には関係ない。」

よかった。響くんは犯罪者に容赦はしないけれど犯罪者ではない人間には手は出さない。

エヴァは今まで沢山の人を殺してはいるがそれは生きるためにやつ

たことで自分から人を殺すようなことはしない。

これで二人が戦うことはないだろう。

「おいジジイ！用件は済んだんだ私はもう帰るぞー！」

エヴァそう言っでは部屋から出ていく。

「じゃあ俺は近くのホテルにでも泊まっています。」響くんはそう言っ出て行こうとするが

「響くん。君は子供は好きかね？」

学園長が真剣な眼差しで響くんに問い掛ける。

「え？ええ。子供は好きですが・・・それがどうかしましたか？」
急にそんな事を聞かれ戸惑いながらも答えている。

「なら君には2-Aの副担任をしてみらおうかの。」
再び沈黙が訪れる。

「はあ！？副担任！？何言っているんですか！？」

驚くのは当然だろう。僕も声には出していないがかなり驚いている。

「どっいつことですか。」

何で俺が副担任なんかに。教員免許なんて持っていないんですけど。

「

「フオツフオツフオツ。

まあ落ち着きなさい。

理由はふたつあつての。

ひとつ目は新しく来る担任の先生の手助けをすること。そしてふたつ目はあのクラスの生徒は色々と事情のある生徒ばかりでの。

何かあつた時に生徒達を守ってもらいたいのじゃ。」「理由は分かりましたが俺に教育なんて出来ると思えないんですがね。それに守るというならタカミチさんがいるから大丈夫じゃないんですか？」

彼の疑問はもつともだろう。今まで戦つてばかりいた響くんは何も知らない子供たちの教育なんて自信がないのだろう。

生徒を守ることなら彼より僕の方が向いてるかもしれない。

「なるほどの。まあ副担任と言っても担任の先生の手伝いで、授業などはあまりする必要はないわい。」

「なんですかそれ・・・。」

呆れている響くんを無視して学園長は続ける。

「それとタカミチくんなんじゃが。魔法世界から呼び出しされることが多くなつての。麻帆良にいることが少なくなつてきておるのじや。」

説明を聞いた響くんはため息をひとつして

「わかりました。この話引き受けましょう。」

副担任になることを引き受けることに決めてくれたらしい。

「それでその仕事はいつからですか？」

「うむ、明日からじゃ。」

「ハア・・・もうどうでもいいです・・・。」
さすがに疲れたのだろう。諦めてしまったらしい。
少し気の毒だ。

「俺はもう帰らせてもらいます。」

「では、また明日の。」

響くんはそのまま部屋を出て行ってしまった。

部屋にいるのは僕と学園長だけ。僕はひとつの疑問を尋ねる。

「どうして彼を副担任なんかにしようと思ったのですか？」

いくら生徒を守る為とはいえ彼より向いている人などいくらでもあるだろう。

「そのことなんじゃがな。彼のような若者がたった一人で戦い続けていると思うと心苦しくての。」

少しの間でも彼に平和な暮らしを送ってもらおうと思っているの。」

「そうですね。ほんの少しの間くらいいいですよね。」

彼はまたすぐにここを出ていくかもしれない。

それでも麻帆良にいる間くらいは楽しい時間を送って欲しい。

僕はそんなことを思いながら響くんが出ていった扉を見ていた。

8話

SIDE 響

俺は学園長室で新任の先生が来るのを待っている。

今にして思えばあの時俺は相当混乱していたのだろう。でなければこんな話を引き受けないだろうし、結局教員免許のこともうやむやになってしまった。

全ては混乱していたからだ。だから俺は悪くない。なぜなら混乱していたのだから。

俺が現実逃避をしていると

「学園長、僕ですが入ってよろしいですか。」

タカミチさんが新任の先生を連れて来たらしい。

俺は気持ちを切り替える。

扉を開けてタカミチさんと何故かジャージを着て長い髪をツインテールにしたオッドアイの子と黒い髪の大和撫子という言葉がぴったりの女の子。

そして赤毛で大きな杖をもってメガネをかけた少年が入って来た。

たしかタカミチさんは新任の先生を連れて来たのではないのか？
何で子供達を連れて来たのだろうか？

俺が疑問に思っているとツインテールの子が学園長に詰め寄り

「学園長！何でこんなガキが私たちの担任なんですか！」

今この子はなんて言った？私たちの担任？
この少年が？

「あのーすいません。
ちよっといいですか？」

学園長に抗議していたツインテールの子は急に話だした俺に気付いたように

「ちよっと！誰よアンタ！」と睨み付けてくる。

「まあ、俺の事は今はいいじゃないか。
それより学園長俺の聞き間違いじゃなければ新しい2ーAの担任が
この少年だと。」

赤毛の少年を指さして聞く。

「うむ。間違いではないぞい。」

学園長はあっさりと肯定してくれた。

「彼は何歳ですか？」

「数えて10歳じゃ。」

10歳の子供が教師をするのか。

「労働基準法って知ってます？」

「大丈夫じゃ。ワシが許す。」

学園長の言葉を聞き俺は・・・

「何が「許す」だ！大丈夫な訳があるか―――！」

爆発した。

昨日に教員免許も持っていないにもかかわらず急に副担任にされ、担任の先生は労働基準法に引っ掛かっている10歳の少年。

さすがに我慢の限界だった。

急に叫んだ俺に学園長と黒い髪の女の子以外が驚いている。

学園長は分かるが女の子スゲーなおい。

「そもそも10歳の子供に教師が勤まる訳がないでしょうが！」

「そうです！何で高畑先生が担任じゃないんですか！」

ツインテールの子も復活して加勢してくる。

「フオッフオッフオッフ。」

学力なら大学を卒業するくらいはあるから大丈夫じゃろ。」

「マジですか！？すごいですね！でも、そういう問題じゃないんですよ。」

いくら学力があっても子供が教師だとナメられてしまうだろう。

「フオッフオッフオッフ。」

さて、ネギ君卒業試験が学校の先生とは大変だとは思って頑張るのじゃぞ。」

このジジイ無視しやがった。

「あと、ネギ君の住む場所が無くての。スマンが二人の部屋に住まわせてくれんかの。」

「「ハア!?!」」

何を言い出すんだこのジジイ!

「ちょっと学園長!何でこんなガキンちょを部屋に住まわせないといけないんですか!」

「そうです!いくら子供とはいえ問題ですよ!」

「ウチはええよ。」

黒髪の子、大物だな君は!

「あと響くんには女子寮の管理人をしてもらうからの。」

「誰かこのジジイを止めてくれー!ー!ー!」

何でこんな奴が学園長なんだ!?

「今まで管理人をしておった人が定年退職して辞めてしまったの。」

困っておったのじゃ。」

「だからって男の俺が女子寮の管理人なんてダメに決まっているでしょう！」

「君なら変な事じゃせんじやろ。それとも君は何かするつもりなのかね？」

「する訳がないでしょう！」

「ならばよいではないか。」

ダメだこのままでは俺は間違い無く女子寮の管理人をしてしまう。この状況を変える方法はただひとつ。

「君たち！君たちはこんな見ず知らずの男が管理人なんて嫌に決まっているだろう。」

いくら学園長とはいえ女子寮に住んでいる彼女たちが嫌と言えば、俺を管理人にすることは出来まい。

「別にええ人そうやし、ええんちゃう？」

黒髪の子はほんわかとした笑顔で言う。

予想はしていたのでかまわないのだが、この子はやはり大物だ。

俺は期待の籠った眼差しでツインテールの子を見る。

この子ならきつと男の俺が女子寮の管理人なんて嫌がるはずだ。そうすれば俺は女子寮の管理人なんてしないですむ。

ところが

「たしかに女子寮の管理人が男なんてどうかと思うけど、この人なら大丈夫じゃない？
いい人そうだし。」

「なん・・・だと・・・。」

希望が潰えた。

「そろそろ時間じゃ。このかと明日菜くんは先に教室に戻っていないかい。」

ネギくんと響くんは会わせたい先生がいるから残っててくれ。」

二人は返事をして学園長室から出ていき教室に行った。

俺がうなだれていると、扉が開きメガネをかけた女性が入って来た。

「この人が君たちの指導教員の源 しずな先生じゃ。」

「これからよろしく願いますね二人とも。」

「はい！こちらこそよろしく願います。」

「よろしく願います・・・。」

微笑むしずな先生と元気な声で返事をする少年。
俺のやる気はほとんどない。

「それじゃあ、2ーAの教室まで案内しますね。」

「俺は学園長と話たいことがあるので先に行って下さい。」

俺はしずな先生にそう言つて学園長室に残る。

二人が出て行つたのを確認して学園長の方を向く。

学園長室にいるのは俺と学園長、そしてタカミチさんだけ。

学園長が防音の結界をはる。

「あの少年ですが魔法使いですね。」

単刀直入に話を切り出す。

「よくわかつたの。」

「あんな大きな杖を持ち歩いていたらすぐに分かりますよ。」

普通隠したりするべきだと思つのだが。

しかし問題は別にある。

「彼は何者なんですか。」

わずか10歳で魔法学校を卒業、学力も大学生なみ。

天才だ。そんな子が普通であるはずがない。

もしも危険な存在なら生徒にまで危害が及ぶかもしれない。

それだけは阻止しないといけない。

「うむ、そのことじゃが彼の父親はナギ・スプリングフィールドで
の。」

もしもこの事が世間にバレたら彼はナギに怨みを持つ奴らの標的になるじゃろつ。

じゃから君に彼を守ってもらいたいのじゃ。」

たしかに英雄の息子ともなれば標的にくらいされるだろう。

「悪いですが彼を守る気はありませんよ。

たとえ大人だろうと子供だろうとこの世界には関係ないでしょう。」

魔法はメルヘンやファンタジーではない。

戦いに使えば簡単に人を殺すことが出来る。

そんな世界に関わったら大人も関係ない。

子供だからといって守る理由にはならない。

だが

「彼を守るつもりはありませんが、何も関係のない人たちは別です。

もしも一般人に被害が及ぶようなら俺も戦います。

それでいいですか？」

何も関係ない一般人が魔法使い達のいざこざに巻き込まれて命を落とすなどあつてはいけない。

もしそうなるのなら俺は黙っているつもりはない。

「彼には俺が魔法関係者であることは明かさないように。

必要なら俺が自分で明かしますから。」

一応彼も修業で麻帆良に来ているのだ。

誰かに頼るようではいけない。

「わかった。そのようにしてくれ。」

「僕もそれでいいよ。」

学園長もタカミチさんも納得してくれたようだ。

「それでは失礼します。」

俺はそう言って学園長室の扉から出る。

「英雄の息子・・・か」。

きっと彼には多くの困難が立ち塞がるだろう。
だが俺がすることは変わらない。

犯罪者から罪もない人達を守ること。

そして俺が今やるべきことはただひとつ。

急いで21A教室に行かなければならない。

俺は先に行った二人に追いつくべく、学園長室を後にした。

9 話

S I D E 響

俺は先に行った二人の後を追って2ーAの教室の前に来たのだが。

ものすごく騒がしい。

自分たちの担任が子供で驚くのは分かるがそれでも騒がし過ぎる。

このクラスの副担任としてやっていけるのか不安になってきた。

だが、いつまでもこうしているわけにもいかない。

俺は意を決して教室の扉を開ける。

そこには先程学園長室にいたツインテールの子が少年の襟首を掴んで持ち上げていた。

扉を閉める。

O K いったん落ち着こう。

俺はまだ混乱しているのだろう。

いくら10歳の子供とはいえ女の子が持ち上げられるわけがないじゃないか。

そうさ、さっきのは俺の見間違いだ。なんかいろいろあってあんな風に見えただけさ。

深呼吸をする。

冷静になった俺は再び扉を開ける。

何も変わっていなかった。

みんなの視線が俺に集中する。

先程まであんなに騒がしかった教室が静まり返っている。

「え」と、俺が誰なのか紹介はするからみんな席に戻ってくれないか？」

俺の言葉を聞きみんなは席に戻る。
聞き分けはいいみたいで助かった。

「えーと、これからこのクラスの副担任をすることになりました。
小野寺 響です。短い間かもしれないけどよろしく。」

何の反応もない。

騒がしくなるのは面倒だが全く反応がないというのもなんか悲しいな。

そう思っていたら。

「「「「「か」「」「」」」」」

そう一言。「か」ってなんだ？「蚊」でもいたのか？そんな訳ないか。

そんなことを思っていたら。

「「「「「かつこいいー！ー！」」」」」

学園全体にまで響きそうな絶叫が起こった。
いや、絶対学園全体に響いた。

「何歳ですか？」「どこに住んでるんですか？」「彼女はいますか？」「闘って欲しいアル。」

せつかく静かになったと思ったのにまた騒がしくなったよ。
というか最後の質問はなんだよ！？

いつまでも続きそうな質問に半ば絶望しかけていたが
「皆さん！いつまでも好き勝手に質問ばかりしてはいけませんわ！」

救いの手が差し延べられた。
これでこの質問攻めから解放される。

「出席番号順に質問をしましょう。」

天国から地獄。

しかたない覚悟を決めよう。

「じゃあ、最初の授業は質問の時間ということでもいいですか？
えっと・・・」

そういえば肝心の名前を聞いていなかった。
向こうもそれに気づいたようで

「そういえば紹介がまだでしたね。
ネギ・スプリングフィールドといいます。
これからよろしくお願いします。」

ご丁寧に紹介をしてくれた。10歳の少年にしてはやけに落ち着いてるな。

俺が10歳の時は・・・何してたっけ？

そんな事はどうでもいいな。俺も紹介しないと。

「俺は小野寺 響。」

あまり頼りにならないかもしれないけどよろしく。」
俺とネギくんがお互いに紹介を終えて場の空気が少し和やかになった。

「よし、じゃあ授業を始めようか。」
そうして授業を始めようとする。

質問攻めは絶対に回避したい。

だがそう上手くいく訳もなく。

「ちょっと質問はどうしたの!」「ちゃんと答えてよ」「闘って欲しいアル!」

とまあ、避難の嵐。

こんな状態で授業が出来るハズもなく。

おれたちは授業の終わりを告げるチャイムが鳴るまで質問という名の拷問を受け続けた。

っていうか最後の質問した奴だれだよ!?

10話

SIDE 響

質問という名の拷問を耐え抜き俺とネギ君は一时间目を終え廊下を歩いているのだが

「うう、初めての授業なのに全然上手く出来ませんでした。」
とネギ君がものすごく落ち込んでいる。

「あの状態で授業出来る人はそういないだろうからあまり気にしない方がいいって。」

俺の言う通り授業は騒がしく、注意すれば収まりはするのだがまたすぐに騒がしくなる。

10歳の子供が先生だから興味が沸くのは分かるがもうちょっと静かにしてほしかった。

とまあネギ君とそんなやり取りをしながら階段にさしかかった時、本を山のように持ってふらふらと危険な足どりで歩いている子がいた。

「あれは出席番号27番の宮崎のどかさん。
あんなに本を持って危ないな。」

「そうだな。怪我でもしたら大変だし、手伝ってあげようか。」

俺とネギ君が手伝ったために宮崎のもとに向かおうとした時――宮崎が足を踏み外した。

あの高さから落ちたらマズい！俺とネギ君は走るがここからでは間に合わない！

宮崎はそのまま地面にたたき付けられーーーーーずに宙に浮いていた。

「は？」

思わず足を止めてしまう。その間にもネギ君は走っていき、ネギ君が宮崎の下敷きになることで宮崎は助かったのだが……一部始終を見ていたのであろうツインテールの子。

たしか神楽坂という名前だったはず、にものすごいスピードで連れていかれた。

少しの間どうしようか考えたが、

「ま、俺には関係ないか。」

ほっとくことにした。

そんなことより宮崎だ！

「おい、宮崎、大丈夫か！？怪我とかしてないか！」

「え？は、はいっ！どこも怪我とかはしていません。」

多少、混乱はしているようだが無事なようだ。

「ネギ先生が助けてくれたからちゃんとお礼を言っておけよ。」

「あの、ネギ先生はどこに？」

自分を助けてくれた人がいないのだ。疑問に思ったのだろう。俺に聞いてくる。

「ああ、ネギ君なら神楽坂にどっかに連れていかれたぞ。」

おそらくネギ君が宮崎を助ける為に使った魔法について問い詰めているのだろう。ネギ君、無事だといいな。

「それよりも宮崎。俺も本運ぶの手伝ってやるから今度から気をつけろよ。」

次も助かるって保障はないんだからな。」

「は、はい。ありがとうございます。」

俺と宮崎は本を拾い歩き出す。

しばらく歩き2ーAの教室の近くに来た時、宮崎が何か思い出したようで

「本を運んでくれてありがとうございます。小野寺先生はここで待っていて下さい。」

宮崎はそう言う俺から本を受け取り教室に入っていた。

本を運んだのはいいが、何故俺はここで待っていないといけないのだろうか？

そう不思議に思っていたら。「小野寺先生こんな所でどうしたんですか？」

ネギ君が神楽坂と一緒に歩いて来ていた。
魔法のことは解決したのだろう。

「宮崎と一緒に本をここまで運んで来たんだけど、ここで待っていてくれって言われてね。
こうして待っている訳だよ。」

ネギ君は納得していたようだが、神楽坂に耳打ちされると突然焦りだし、

「あの、さっきのことなんですが・・・。」

魔法使ったことについてだろう。いくら魔法は秘匿されるものとはいえ、人を助ける為だったから別にいいだろう。

「それにしてもネギ先生はよく間に合ったな。俺はもうダメかと思っ
て走るのをやめてしまったよ。俺もネギ先生を見習わないとな。」

「そ、そうですか！？ありがとうございます。」

ネギ君は褒められたのが予想外だったのだろう。
驚いている。

「ま、さっきのことはいいわ。私は二人が来たことみんなに伝えてくるから呼んだら教室に入ってきて来て。」

神楽坂はそう言うと言った教室に入っていたのだが、

「ネギ先生。みんな俺たちに何かあるのか？」

「はい！なんでも皆さんがぼくたちのために歓迎会を開いてくれるらしいんです。」

ネギ君はみんなが自分たちのために歓迎会を開いてくれたことが嬉しいようで、さっきからそわそわとしている。

まあ、歓迎会なんて俺もされたことはないから気持ちは分らない。

「いいわよ二人共。入って。」

そうこうしているうちに神楽坂に呼ばれネギ君が教室の扉を開ける。

「「「ようこそ、ネギせんせい、小野寺せんせい。」」」

いくつものクラッカーの音と歓迎の声。

ネギ君は最初はビックリしたがしだいに笑顔になっていく。

「みなさん、ありがとうございます。」

ネギ君はそのまま手を引っ張られていかれ、女の子たちにもみくちゃにされている。

彼女たちの邪魔をしないように教室の隅に移動する。

決して見捨てたわけではない。

「やあ、響くん。このクラスはどうだい？」

彼女たちのやり取りを見ていたらタカミチさんが声をかけてきた。

「元気なのはいいんですがもう少し落ち着いて欲しいですね。少し疲れてしまいましたよ。」

「落ち着いて欲しいのは僕も同意見だけど無理だろうね。」

タカミチさんは苦笑する。

彼女たちとネギ君はとても楽しそうに笑っている。

「タカミチさん。今からでも俺が副担任になるのを取り消すことって出来ませんか？」「」

「どうしたんだい、急に？」

突然そんなことを言う俺にタカミチさんは不思議そうに聞いてくる。

「やっぱり俺みたいな人間が彼女たちの近くにいてはいけませんよ。」

俺はいくら犯罪者とはいえ多くの人を殺している。

犯罪者を殺したことにについて後悔はしていないが俺に恨みを持っている人間は多くいるはずだ。

そんな人間が俺に復讐する為に彼女たちを巻き込む可能性だってあ

る。

関係のない彼女たちに危害が及んではいけない。

「たしかに君の気持ちも分かるけど、このクラスは少々厄介だね。英雄の息子に関東魔法協会の理事である学園長を祖父に持つ関西呪術協会の長の娘。

それに真祖の吸血鬼までいる。

ほかにも色々と事情のある子が多くてね。

そんな彼女たちを守りやすいようにこのクラスに集めているんだけど、ほかの先生にはこのクラスは荷が重いし、かといって僕は本国からの呼び出しが多くて学園にいること自体が少なくなってきたね。正直どうしようか困っていたんだ。」

そこまで言うとかカミチさんは真剣な顔で俺を見る。

「そんな時に君が来た。」

俺は目を逸らすことなくカミチさんを見る。

「君は犯罪者たちにとって天敵といってもいい存在だ。

そんな君がいれば彼女たちに手を出しにくいだろうし、仮に手を出されたとしても君なら彼女たちを守ることが出来る。

何も関係のない君に押し付ける形になってしまっけれど、どうか彼女たちを守ってあげて欲しい。」

カミチさんはそう言った。

彼女たちがいなければ間違いなく頭を下げているだろう。

「わかりました。俺なんかでよければ彼女たちを守ります。」

「そうか・・・ありがとう。」

タカミチさんは嬉しそうに微笑む。

俺とタカミチさんは彼女たちを見る。みんな楽しそうに笑っている。

彼女たちを絶対を守る。

俺はみんなの笑顔を見ながらそう心に誓った。

その後、俺は彼女たちに気づかれ案の定質問攻めにあうのだった。

11話

SIDE 龍宮

時刻は深夜0時。

私達は響さんとの顔合わせの為に世界樹広場に來ている。

「皆も知っておると思うが学園で2ーAの副担任をしてもらうことになった小野寺 響くんじゃ。」

「小野寺 響です。よろしく願います。」

彼の名前を聞いた途端に周りがザワめく。

「小野寺 響。本物か？」

「どうして彼が麻帆良で副担任をするんだ!？」

「いますぐにでも麻帆良から追い出すべきだ!」

いろいろと言っているようだが、彼らの反応は当然だろう。

彼と一緒に戦ったことのある私や高畑先生は、彼が普段は温厚で面倒見のいい人だと知っているが彼らは違う。

幼い頃から立派な魔法使いを目指してきた彼らにとって犯罪者とは

いえ、多くの人を殺してきた彼は嫌悪すべき対象なのだろう。

彼は犯罪者には容赦しないからね。

「学園長！！どうして彼のような人間が麻帆良にいるのですか！？」

魔法関係者のひとりが学園長に詰め寄る。

「そのことじゃがのう。」

昨夜、潜伏していた犯罪者を追って彼が麻帆良に来たのじゃ。

潜伏していた犯罪者は彼が始末したのじゃが、その時にエヴァの奴と出会って戦闘になったのじゃ。

その時はタカミチくんが何とか止めたのじゃが、彼が納得しなくての。

こちらとしてはエヴァを殺されては人手が足りんくなるし、ナギの奴との約束もある。

それで彼にエヴァの監視として21Aの副担任になってもらったのじゃ。
「

ですが！」

「彼は犯罪者でない者には危害は加えん。
そうじゃる響くん？」

響さんは軽く頷き、

「俺は犯罪者でない者に危害を加わるつもりはありませんが侵入者

と犯罪、もしくは一般人に危害を加えた魔法関係者は問答無用で殺すのでそのつもりで。」

「「「な!?!」」」

響さんの発言に学園長、高畑先生、私を除く全員が言葉を失う。

「な、何を言っているんだお前は!?!」

「貴様に何の権利がある!?!」

「命を何だと思っているんだ!?!」

響さんは少しの間それらを聞いていたがやがてつまらなそうにため息をつく。

「ゴチャゴチャとウルセエんだよテメエら。」

恐ろしく冷たい声が響いた。

「どいつもこいつもくだらねえことばかり言いやがって!

何の権利があつて!?

命を何だと思っている!?

テメエらが人のことを言えんのかよ!?!」

響さんは狂気に歪んだ顔で叫ぶ。

「我々とお前を一緒にするな！！」

「じゃあ聞くがテメエらは今まで人を殺したことがないのか？」

「私たちも人を殺したことくらいはある。しかし、侵入者も我々も殺す必要などないハズだ！！」

それを聞いた響さんの顔から狂気が消え、まるでその辺にある小石を見るような冷たい表情になる。

「侵入者ですら殺す必要はないとは、まさか本気で言ってるのか？」

響さんの急な変化にみんなが戸惑う。

「殺しに来た奴らを殺して何が悪い？」

殺していいのは殺される覚悟のある奴だけだ。
違うか？」

響さんの問い掛けに誰も答えられない。

「それに犯罪を犯した魔法使いが殺されるのは当然だろう。」

「我々魔法使いが犯罪を犯した場合はオコジョにされ「だからそれが温いって言ってるんだよ！！」る・・・」

冷めきっていた響さんの表情が再び狂気で歪む。

「オコジヨにされるからなんだ！
どうせその犯罪も魔法の秘匿の為に被害者の記憶を消してなかった
ことにするくせによ！！」

響さんの言う通り魔法の秘匿の為に事件をなかったことにするなんてよくあることだ。

「それにお前らは攻撃を受け難いように麻帆良に住む人たちを盾として使い、魔法の秘匿の為に麻帆良に住む人たちを騙し続けている！！」

その上罪もない人たちに危害を加わるような奴に生きる資格はない！！

犯罪者は殺す！！

それがたとえ学園長だろうと！！

真祖の吸血鬼だろうと！！英雄の息子だろうと！！

犯罪者は必ず殺す！！」

「英雄の息子！？

犯罪者なら子供でも殺すのか！？」

「それに彼は魔法界の宝だぞ！！
それを殺すなんて！！」

内心舌打ちをする。

これ以上響さんを刺激しないで欲しい。
いくら犯罪者以外は殺さない響さんとはいえいつまでもつか分らない。

響さんが何か言おうとして口を開いた時、

「顔合わせがあるから来てみればなかなか面白いことになっているじゃないか。」

響さんから殺気があふれる。視線の先にいるのはエヴァンジェリン。

最悪な時に最悪な人物が来た。

私はいつでも銃を抜けるようにしておく。

見れば高畑先生もポケットに手を入れ攻撃の構えをとっている。

内心ため息をつく。

ただの顔合わせがどうしてこうなったのか。

これが終わったら響さんに何か奢らせよう。

私はそう心に誓って二人を見ていた。

S I D E エヴァ

小野寺 響と魔法使いたちとの顔合わせがあると聞き来てみたが、

やはりこうなったか。

ま、最初から分かってはいたがな。

「顔合わせがあるから来てみればなかなか面白いことになっているじゃないか。」

そう言つて奴らの前に姿を現す。

茶々丸は奴らに礼をしている。律義な奴だ。

魔法使いどもは突然現れた私たちに驚いているようだが奴は違う。殺気があふれ顔が狂気に歪んでいる。

「やはりお前は魔法使いどもと仲良くは出来なかったか。」

「あたりまえだ。『命は大切です。人を殺してはいけません。』とか言つておきながら正義の旗の下殺しを正当化するような奴らと仲良くは出来んさ。」

奴は口を歪ませ面白そうに笑っている。

「それでお嬢ちゃんはこんな所でどうしたんだい？迷子にでもなったのかい？」

「私を馬鹿にしているのか貴様。こうみえても600年生きているんだ。」

口の聞き方に気をつけるよ小僧。」

奴は軽く笑つと銃剣を取り出し

「600年か。なら十分長生きしただろう。
デメエはもう死ね!!」

「戦うつつもりはなかったが気が変わった。
口の聞き方を知らん小僧には教育が必要だ。
構える茶々丸!!」

「かしこまりました、マスター。」

私はマントから触媒を取り出し、茶々丸は攻撃の構えを取る。

殺気が満ちる。

「死ね!!エヴァンジェリン!!」

大量の紙が宙に舞い上がり奴が突っ込こもった時

「やめんか!!二人とも!!」

思わず攻撃しようとしていた手を止めてしまふ。

私たちだけでなく、他の魔法使いやタカミチまで驚いている。

「小野寺 響、ワシらとの取り決めに破る気か!
エヴァも彼を挑発するでない!!」

舞っていた紙は青い炎をあげて燃え、奴は銃剣をしまい私たちも攻撃の構えをとく。

奴の顔から狂気が消え穏やかな顔になる。

「すいません。犯罪者がいたものでつい。

このままだとまた戦いそうなので俺は先に帰らせて貰いますね。」

そう言っつて奴は帰ろうとする。

「小野寺 響！英雄の息子は私の獲物だ！手を出すなよ！！」

帰ろうとする奴の背にそう言い放つ。

「好きにしろ。

ただし一般人に危害を加えないことと、命は奪わないこと。これが条件だ。

これを破れば問答無用で殺す。」

「いいだろう。一般人に危害は加えんし、女、子供は殺さん主義だ。だから貴様も手を出すなよ。」

魔力回復のために一般人から血を吸うことが出来なくなったのは辛いが、これで堂々と坊やを襲うことができる。

「帰るぞ茶々丸。」

「失礼します。」

あまり期待はしていなかったが中々の収穫だ。

さつさと帰って茶々丸の煎れた紅茶でも飲もう。

私はそう考えながら家への帰宅を急いだ。

SIDE タカミチ

「学園長！！やはり彼は危険です。麻帆良においておくべきではありません！！」

「そうです！おまけにエヴァンジェリンがネギ君を襲うことを許しました。」

彼は我々の敵です！！」

二人が帰った後みんなが学園長に詰め寄っている。

「みんな落ち着くんじゃ。響くんは我々が一般人に危害を加えなければ基本無害じゃし、エヴァの奴も我らの前で約束をしたからの。それを破るようなマネはせんじやろう。」

「そんな呑気なことを言っている場合ですか！！
何か起きてからでは遅いのですよ！！」

それでもみんなは納得せずに学園長をせめている。

学園長はしばらく困っていたようだが僕の方を向き

「そういえばタカミチちゃんと龍宮くんは彼と一緒に戦ったことがあ

るらしいが、二人から見ても彼はどうじゃね？」

そう僕らに言ってきた。

「問題ないと思いますよ。彼は犯罪者が絡むとああなりますけど、普段はとても温厚ですからね。」

僕らが犯罪をしなければ彼は何もしませんよ。」

「私も同意見だよ。」

彼は自分から人を襲うようなマネはしないよ。

もっとも犯罪をした者には命の保障はないけどね。」

「しかし・・・」

彼らは僕らの意見を聞いても納得は出来ていないようだ。

「わかりました。」

もしも彼が何の罪もない人を襲うようなら僕に言って下さい。

僕が彼を止めますから。」

そう言うともみんな安心したようで引き下がっていくが、

「すいませんが彼がどのような戦い方をするのか教えてもらえないでしょうか？」

「それもそうですね。」

彼は主に接近戦を中心に戦います。

まあ、離れても銃剣を放ってくるので安心はしないで下さい。」

「彼は魔法は使わないんですか？」

「使わないんじゃないんで使えないんですよ。」

彼の体質で魔力がないうえに気を扱うこともできないようです。そのかわり彼の体は頑丈で大抵の傷なら再生しますけどね。」響くんが魔法が使えないうえに気を扱えないことを知りみんな安心したようだ。

「魔法が使えないのなら別に高畑先生じゃなくても私たちで対処出来んじゃないですか？」

「それだけはやめて下さい！そんな甘い考えでは確実に彼に殺されます！」

僕の急な変化にみんな戸惑う。

「で、でも魔力がなくて気も扱えないんじゃないって強くは……」

「

僕もみんなの気持ちはわかる。

僕も魔法は使えないがそれは生れつき呪文の詠唱が出来ないだけで魔力はある。

僕は鍛練を重ねて魔力と気を融合させて出来る咸卦法を会得した。

これで僕は普通の魔法使いよりもかなりの実力を手に入れたのだが、彼には魔力そのものがない。

故に咸卦法を会得することは出来ない。

気を扱うことも出来ないので肉体を強化して戦うことも出来ない。

「たしかに彼には魔力がなく気を扱うことも出来ません。」

そのかわり彼の体は頑丈で、そのつえ頭を銃で撃たれても致命傷にならない程の再生能力があります。
ですから決して彼を甘く見ないで下さい。」

「わかりました。

もし彼と戦うことになったらすぐに高畑先生に伝えます。」

僕の説明を聞いてようやく分かってくれたらしい。

「もつとも普通に過ごしていれば彼と戦うことはないと思いますから安心して下さい。」

「まあ、そういうことじゃから皆もあまり彼を警戒し過ぎないように。」

それでは今日はもう解散じゃ。」

学園長の解散の合図で皆は広場から去っていく。

初日からこれとは先が思いやられる。

けれど僕が響く人と戦うことはないだろう。

響くんは罪もない人を殺すような人じゃない。

他の先生たちが不安に思っているなかで僕は軽い足どりで家路に付いた。

12話

SIDE 響

午前中の騒がしい授業を終えて今は昼休み。
午後もある授業を思うと少し憂鬱だ。

そんな気分を変えるべく俺は暖かな日差しの中を散歩をしているの
だが、

「・・・・・・・・落ち着かない。」

なぜなら周りにいるのは女の子ばかり。
そしてほぼ全員が俺を見てヒソヒソと話している。
女子校エリアに黒のロングコートを着た男。

正直かなり怪しい。

だからといってコートは絶対に脱がない!!

絶対にだ!!

話が脱線してしまったが、ようは居心地が悪いということだ。

おそらく彼女たちの興味は俺ではなく、子供でありながら教師であ
るネギ君に向いているのだろう。
だから俺が教師であることも知られていないのかもしれない。

そんな結論に至り少しショックを感じていたら。

「やあ、響くん。調子はどうだい？」

タカミチさんが声をかけてきた。

タカミチさんが声をかけているので関係者と分かったのか俺への視線が和らぐ。

「気分転換に散歩をしていたんですが逆に疲れてしまいましたよ。」

「君は麻帆良に来たばかりでみんな知らないからね。すぐに慣れるよ。」

「そつだといいんですけどね。」

他にもネギ君のする授業のことや2ーAの皆のことを話していると2ーAの子達と違う制服を着た子達が何やら言いあっている。

「あれは2ーAの子とウルスラの子だね。」

「止めなくていいんですか？」

「少し様子を見てみようか。」

彼女達が言い合っているとボールが飛んで来てウルスラの子に当たった。

「神楽坂と雪広ですね。」

どうしますか？そろそろ止めます？」

「ネギ君が来たみたいだから彼に任せてみようよ。」

「そうですね。」

俺達はそのまま見守る。

ネギ君は必死で彼女達を止めようとしているが聞いてもらえず、ウルスラの子達にもみくちやにされている。

そしてそれを止めようと神楽坂と雪広が彼女達と取っ組み合いの喧嘩になった。

「あれはさすがに止めて来ますね。」

「元担任だし僕が行こうかい？」

「一応副担任なんで俺が行きます。それでもダメならお願いします。」

そう言っただけ俺は騒ぎを止めるべく向かう。

二人を中心に騒ぎが大きくなっていき他の子まで加わりつつある。

「そこまでだ二人とも。」

俺は殴りかかろうとしていた二人の腕を引っ張って喧嘩をやめさせ

る。

「小野寺先生！？」

二人は突然止められて驚いている。

「何があつたか知らないけど暴力はいけないだろ。」

「だけど先生！こいつらが先に！！」

「ちよつとなんであなたみたいな男がいるの！？
ここは女子校エリアよ！！」

神楽坂が反論しようとしたがウルスラの子によって邪魔される。

「それもそうだな。」

俺はこの子達の副担任の小野寺 響。

まあ、よろしくな。」

俺は彼女達に自己紹介をする。

これで覚えてくれればいいのだが。

「ところでどうしてこんなことになったのか説明してもらえないか
？」

「それならわたくしが説明致しますわ。」

雪広の説明によると、佐々木、大河内、明石、和泉の四人が遊んでいたらウルスラの子たちが来て場所を寄越せと言ってきたらしい。当然、渡す訳もなく口論になったところ、見るに見兼ねた神楽坂と雪広が乱入。

結果、取っ組み合いの喧嘩にまで発展してしまったということらしい。

「大体のことは分かった。君達、いくら先輩だからってやっていい事と悪い事があるだろう。」

先輩なら後輩の手本になるように行動しないと。」

「す・・・すみません。」

彼女たちも分かってくれたようで、申し訳なさそうにしている。

「神楽坂と雪広もいくら相手が悪いからって暴力はいけないだろ。怪我でもしたら大変だしな。」

「じ・・・ごめんなさい。」

「申し訳ありませんでした。」

神楽坂と雪広も分かってくれてよかった。

取っ組み合いの喧嘩なんてしてはいたがみんな素直ないい子だ。

「みんな分かってくれたようだから、このことはこれでおしまい。そろそろ授業が始まるからみんな遅れないように。」

俺がそう言つとみんな元気な返事をして教室に戻っていく。

「すみません小野寺先生。僕は担任なのに喧嘩を止められなくて。」

ネギ君が申し訳なさそうに俺に謝る。

俺としてはもう少し子供らしくしてもいいと思うのだが。

「あんまり気にすることはないって。

いくら教師といっても君はまだ10歳の子供だ。

もつと周りを頼っていいんだ。

それで少しずつ成長していけばいいんだよ。」

「はい!!ありがとうございます!!」

ネギ君はとても嬉しそうに笑う。

「それじゃあ俺たちも行こうか。」

「はい!」

こうして騒がしかった昼休みは終わった。

はずだったのだが。

21Aの子たちとウルスラの子たちがドッジボールをしている。

このことを説明する為に少し時間を遡る。

昼休みが終わり俺とネギ君で2ーAのみんなについて話をしていたのだが、

「小野寺先生！ネギ先生！大変！さっきの高校生がまた！」

佐々木が慌てて職員室に入ってきた。

「さっきので分かってくれたと思ったのにな。」

「とりあえず行きましょう。案内して下さい。」

俺とネギ君は佐々木に案内されてグラウンドへ行く。

俺達が着いた時には一触即発の空気でもうちょっと遅ければまた、喧嘩になっていたかもしれない。

「また喧嘩か・・・しかたないな。」

俺は止めようと彼女たちの元へ向おうとするが、

「小野寺先生！ちょっと待って下さい！」

ネギ君に止められた。

「どうしてだいネギ先生？早く止めないと。」

こうしている間にも状況は悪くなっていく。

「さっきはダメだったけど今度はちゃんとやって見せます。だから、小野寺先生はここで見ていて下さい。」

ネギ君は真剣な顔で俺を見る。

今のネギ君になら任せても大丈夫だろう。

「分かった。ここはネギ先生に任せるけど、またさっきみたいになつたら俺も止めるからな。」

「はい！任せて下さい。」

ネギ君は彼女たちの元へ向かう。

「皆さん！喧嘩はいけませんよ！」

ネギ君がそう言つて喧嘩を止める。

よし、いい感じた。

「でもコートが……。」

「先に来たのは私たちよ。」

「え、えつと……。」

彼女たちの反論にネギ君は困つてしまう。

負けるなネギ君！頑張れ！

「そ、そうだ！一緒にコートを使いましょう。一緒にバレーをするんですよ。」

ナイスだネギ君！よく頑張った！！

「いいわよ。」

彼女たちも分かってくれたようだこれで喧嘩は「勝負ってことね。」
終わって・・・。

えっ・・・勝負・・・？

「私たちが負けたらコートから出ていくし、昼休みも邪魔したりしない。」

「そんな事言っただけでそっちの方が年齢も上だし体格だって全然違うじゃない！」

「それもそうね。」

それじゃあハンデをあげる。

種目はドッジボール。

私たちは全員で11人。

そっちは倍の22人。これでどう？」

「わかりましたわ。」

その勝負受けて立ちますわ。」

何故か勝負することが決定してしまった。

「ただし、私たちが勝ったらネギ先生と小野寺先生は譲って貰うわよ！」

「「なんですって——!?」」

神楽坂と雪広が叫ぶ。

そして、みんなはコートへ移動してしまった。

落ち込んだ様子のネギ君が帰って来た。

「ネギ君・・・どうしてこんなことになったんだろうね・・・。」

「僕もよく分かりません・・・。」

二人してため息をつく。

こうして俺とネギ君を賭けたドッジボール対決が幕を開けた。

13話

SIDE 響

今日はいいい天気だ。

青空が広がり白い雲が空の青さを引き立てている。

いきなりだが空が青いのは海が関係している訳ではない。

光には元々全ての色があり、光が地球の大気の中を通る時に光の中の青の部分が大气とぶつかり空に散らばるのだそう。

結果、空が青く見えるという訳だ。

これは空だけではなく、海や他の物体も吸収出来ずに弾かれた色が、俺たちの目に写るということだ。

現実逃避終了

体育の授業は何故かウルスラvs2-Aのドッジボール対決になってしまった。

ちなみに2-Aが負けるとネギ君と俺はウルスラのたちの担任になってしまう。

ちなみにネギ君は2-Aのみんなとドッジボールに参加している。

「龍宮、お前は参加しないのか？」

ドッジボールの人数は2-Aが22人である為、参加しない子も出

てくる。

そのうちの一人である龍宮に声をかける。

「やあ響さん。

私はあんまり興味がなくてね。

ここで見物しておくよ。」

俺とネギ君がウルスラに行くかもしれないのに興味が無いとは少しひどい気もするが、まあいいか。

そんな話をしていると絡繰が打ち上げた花火によって戦いが始まる。

良かったのか花火を打ち上げて？

他のクラスは授業中だろうに。

絡繰の合図で神楽坂がボールを投げるが止められてしまう。

ウルスラの子が投げたボールが数人の子を巻き込んだ。

「ハンデに見せかけて自分達に有利な条件を認めさせる。
あの子たち中々やるな。」

「感心している場合じゃないと思うんだけどね。」

ウルスラの子たちの衣装が変わった。

なんでも彼女たちは『黒百合』というチームで、ドッジボールの関

東大会の優勝チームらしい。

「関東大会優勝とは。

21Aの勝ち目は薄いかな？」

「先生、なんだかんだ言いながら結構楽しんでいるじゃないか。」

彼女たちの攻撃は止まらず、一人の子がボールを空中に浮かせ、もう一人がそれをキャッチする。

「必殺――太陽拳。」

宙に浮いた子と太陽が重なりそれを見てしまった神楽坂は目が眩んでしまい、ボールに当たってしまった。

「太陽で相手の目を眩ませるとは、中々の技術だ。」

「先生はどっちの味方だい？」

龍宮が呆れているが無視しておく。

神楽坂はアウトになったのだが相手はボールを取ると再び神楽坂に当てた。

ルール上は問題ないかもしれないが、これは黙っている訳にはいかない。

俺が注意しようと向かおうとした時、突如として強い風がウルスラの子を襲う。

これは自然に吹いた風じゃない。

見るとネギ君の口が僅かに動いている。

魔法を使っている。

ネギ君は何も知らない子たちに魔法を使っていやがる。

「響さん。今はダメだよ。」

龍宮の言葉で我に帰る。

「少し殺気が出ていたよ。何も知らない子もいるから、気をつけてね。」

「悪い龍宮。俺もネギ君のことは言えないな。」

ネギ君は神楽坂に何か言われている。

神楽坂は魔法のことを知っているのか？

風が止み、試合が再開するがのだが、

「明日菜まで抜けちゃったよ！」

「中学生と高校生。」

最初から勝ち目なんてなかったんだ！」

神楽坂が抜けたことにより2ーAに諦めのムードが漂う。

「皆さん!!」

諦めちゃダメですよ!!

最後までやってみないとわからないじゃないですか!!」

諦めかけていた皆をネギ君が励ます。

「そうだよみんな!

最後まで諦めずに頑張ろうよ!!」

「女子中学生の底力見せてあげるわ!!」

諦めの空気は霧散し、みんなやる気に満ちている。

「やるなあネギ先生!!」

「嬉しそうだね、先生。」

そして、2ーAの反撃が始まった。

ウルスラの子が投げたボールを明石がキャッチするとドリブルしていき、

「 Dank シューート!!」

明石が放ったボールは見事相手の子をアウトにした。
だが、相手が黙っている訳もなくすぐに反撃してくるが、和泉がボールを蹴り返し相手に当たる。

「ボールって蹴っても良かったっけ？」

「大丈夫だよ・・・きつと。」

相手は弾かれたボールをキャッチしようとするが、佐々木のリボンがボールを捉える。

佐々木はリボンを操りボールを相手に当てていく。

「おい佐々木！！

いくらなんでもそれは反則だろ！！」

「さすがにあれはね・・・。」

その後も2ーAのみんなはボールを蹴ったり、メカを使ったりして高校生を相手に奮闘する。

ピッピーーーー！！

そして、試合終了のホイッスルが鳴り響き2ーAのみんなが勝利したのだが、

「龍宮・・・みんなの勝利に素直に喜べない自分がいるんだがどうしたらいいと思う？」

「ここは素直に喜べばいいと思うよ。」

そう言われ彼女たちを見ると、みんなとても嬉しそうだ。

「まあ、いいか。」

俺はネギ君の元へ行く。

「やあネギ先生。みんなが勝ったね。」

「はい！みんな最後まで諦めずに頑張ってくれましたから。」

とても嬉しそうだが、

「だけど、途中の風は何だったんだろうね？
自然に起きた風とは思わずらいけど・・・。」

魔法を使ったことを出しておく。

今回は何も無かったが、もしも誰かが怪我をしてしまったてはいけない。

「さ、さあ・・・い、い、一体何だったんでしょうね。」

先程とは打って変わってかなり焦っている。

もう少し落ち着いた方がいいだろうに。
後で学園長に報告しておくか。

「まあ気にしても仕方ないか。それより次の授業もあるからみんなを止めようか。」

今も騒いでいる彼女たちを止めるのは骨が折れそうだ。

俺とネギ君は苦笑いを浮かべながらみんなを止めに向かった。

14話

SIDE 響

学校も終わり俺はネギ君と鳴滝姉妹の4人で学園内を歩いている。

ことの発端はネギ君が麻帆良に来たばかりで地理が詳しくないので、じゃあ俺と一緒に麻帆良を回ろうということになったのだ。

しかし俺もあまり麻帆良に詳しくなかった為、二人して迷子になっていた所に散歩部である2人が通りかかり案内して貰うことになったのだが、

「お姉ちゃんばかりズルイですよ。」

「いいじゃん別に〜〜。」

「あ、後で僕もいいですか？」

とまあ、肩車の争奪戦が繰広げられている。

俺は3人を代わる代わる肩車をしながら学園内を歩いていたのだが、肩車をした時のネギ君のはしゃぎようは歳相応でとても微笑ましかった。

普段がしっかりとしているから忘れがちだが、ネギ君は10歳の少

年だ。

表には出さないが本当は不安だろう。

魔法関係者としては何もするつもりはないが、教師としては出来るだけサポートしていきたい。

しかし、よく考えるとネギ君は10歳だから鳴滝姉妹より年下なんだよな。

今更だか21Aの何人かは年齢詐称しているんじゃないのだろうか？

「先生なんか失礼なことを考えかつた？」

「お姉ちゃんもですか？
私事です。」

2人はジト目で俺を見る。

「おいおい、そんな訳ないだろ。」

自分の生徒が年齢詐称してるなんて考える訳ないじゃないか。」

「小野寺先生言っちゃってますよ。」

「人を見た目で判断したらいけないんだよ!!」

「ひどいです！謝って下さい！！」

2人は一斉に俺を非難するが、ちょっと考えてみて欲しい。

鳴滝姉妹の身長はともに130位。

小学生はおるか幼稚園児だといっても通用するだろう。

ここでひとつ質問だが、初対面でこの2人を中学生だと分かる人間がいるのだろうか？

もしもいたとしたら、その人の目は正常に機能しているのだろうか？

結果、俺は悪くない。

「じゃあ聞くが、お前たちは自分の姿を見て中学生と言いきれるか！？」

そして沈黙。

しばらくの間沈黙に包まれた後、俺に襲い掛かる暴力。

鳴滝姉は俺の髪の毛を思いっきり掴みその全てを抜くかのように力を込めて引っ張る。

鳴滝妹は俺の膝を蹴り続けている。

蹴り自体の威力は決して高くはないが、同じ所を蹴り続けられているので痛みが蓄積していくのでだんだんと痛くなってきた。

このままではさすがの俺でもやばい！！

納得はいかないがここは謝るしかない。

「年齢詐称してるなんて言っただけ悪かった！反省してる！だからやめてくれ！！」

「そうですよ！いくらなんでも暴力はいけませんよ！！」

俺の謝罪の言葉が届いたのか、それともネギ君のおかげかは知らないが暴力は止んだ。

「本当に反省している？」

「本当に反省している。あんなこと言っただけ悪かった。」

よく考えてみれば彼女たちも自分の外見を気にしていたのかもしれない。

俺の軽率な発言で彼女たちを傷つけたのなら、俺は本当に反省しないといけない。

「じゃあ、なんでも言っただけ聞いてくれる？」

「あんまり無茶なのはダメだぞ。」

いくら彼女たちでも、無茶な要求はしないハズだ。

そう信じたい!!

「じゃあご飯好きだけ食べてもいい？」

「分かった。好きなだけ食わせてやる。」

「やったー！ー！食べ放題だー！ー！！」

「先生太っ腹ー！ー！！」

暴力は止み、同時に響く喜びの声。

彼女たちは本当に傷ついたのだろうか？

「そうと決まったら早速行くよー！ー！！」

上手く乗せられた気がしないでもないが、嬉しそうだからいいか。

まずは、彼女たちが見掛けによらず大食いでないことを祈ろう。

S I D E ネギ

小野寺先生がみんなにご飯を奢ることが決まった後も案内は続いた。

小野寺先生はご飯を奢ることについては不満はないようだけど、髪の毛を引つ張られたのが嫌だったらしく肩車をしてくれなくなった。

僕としては肩車をされたのは初めてだったから最初は怖かったけど、いつもより高い所から見る景色は新鮮でとても楽しかった。

また肩車をしてくれないか今度頼んでみよう。

「うーん。今日は小野寺先生が喜びそうな水泳部も新体操部も休みだからどうしようかな」。

「・・・更衣室でも覗いとく？」

「お、お姉ちゃん！」

「俺が喜びそうってどういうことだコラ！！
たとえ部活が休みじゃなくても行かねえよ！！
あと、更衣室を覗くのはもはや犯罪だろ！！！」

「そうですよ!!」

いくらなんでもそれはいけませんよ!!」

「冗談なんだから本気にしないでよ〜〜。」

僕たちが本気で反論した為に風香さんは涙目になる。

「い、いや。俺たちも本気にして悪かった。」

「すいませんでした風香さん。」

「お姉ちゃんごめんなさい。」

僕たちも少し言い過ぎたかもしれない。
みんなが謝ると風香さんは笑って

「たしかにぼくも悪かったけど、みんな本気で怒るんだもん。
少し怖かったよ。」

そう言って許してくれた。許してもらえて良かった。
今度から気をつけないと。

その後、僕たちは二人に案内されて裏道やオススメのお店、それに
麻帆良の人もあまり知らないような所を回った。

その間にも二人はいろんな物を食べていたし、僕も少し小野寺先生にご馳走してもらった。

そして辺りはすっかり夕焼けに染まって薄暗くなってきた。

「俺は見回りついでにこのまま夕食を食べるつもりだけど、みんなはどうする？」

小野寺先生が僕たちにそう尋ねる。

きつと夕食もご馳走してくれるのだろうけど、さすがに申し訳ない寮でこのかさんがご飯を作ってくれているだろう。

「せっかくですけど寮でこのかさんが夕食を作ってくれていると思うので、僕は遠慮しておきます。」

「さすがに夕食まで奢って貰うのはちょっと・・・。」

「そうですね。もう十分ご馳走して貰いましたから。」

二人は案内の最中かなりの量のデザートを食べていた。

「そうか。それじゃあ3人とも気をつけて帰るんだぞ。」

「はい。小野寺先生今日はありがとうございました。」

「小野寺先生さようなら〜」。」「」

こうして僕たちは小野寺先生と別れて寮に帰った。

今日はとても楽しかったな。

また今度肩車して貰おう。

SIDE 響

3人と別れて俺は鳴滝姉妹オススメの店、『超包子』を訪れていた。

この店は3-Aのクラスメイトの超鈴音がオーナーで四葉五月が料理長らしい。

この敗北感はなんだろう。

「小野寺先生ネ。いらっしやっませ!!」

いらっしやませ。小野寺先生。

俺が敗北感に浸っていると元気な声で現実に戻された。

「やあ二人とも。ここの料理はとても美味しいと聞いから、夕食に思ってたな。」

「それは嬉しいネ。是非とも食べていつてヨ。」

メニューは何にしますか？

「それじゃあ、肉まんと焼売に餃子をお願いする。」

わかりました。

四葉はそう言つと慣れた手つきであつという間に頼んだ料理を作り上げた。

どうぞ召し上がれ。

「それじゃあ、いただきます。」

そう言つてまずは肉まんを一口。

肉まんは中身がぎつしりと詰まっていて、噛むと同時に肉汁があふれ出し、とても美味しい。

「美味しい！！こんなに美味しい肉まんは生まれて初めてだ。」

ありがとうございます。

俺の言葉を聞き四葉はとても嬉しそうに笑う。

その後も俺の手は止まらずずっと料理を食べていたが、視線を感じたのでそちらを見ると超鈴音が俺の顔をじっと見ていた。

その顔は少し真剣なので正直言つと少し食べずらい。

あちらも気付いたようで少し顔を赤くすると、

「あなたをお父さんと呼んでもいいですか？」

「グフツ!？」

そう聞いてきた。

思わず口の中のものを吹き出しそうになったが、なんとか耐えた。

そのかわり気管に入って思いっきりむせたが。

はい、お水です。

四葉から水を受け取り一気に飲み干す。

しばらくして落ち着くと超に理由を尋ねる。

「どうして俺をお父さんなんて呼びたいんだ？」

「最初見た時から思っていたけど、あなたは私のお父さんにそっくりネ。

だからお父さんと呼ばせて欲しいヨ。」

彼女は恥ずかしそうに少し顔を赤くしている。

彼女はおそらく一人で日本に来て学校生活を送っていた。

そこで故郷に在るであろう自分の父親にそっくりな俺が来た。

故郷に両親を残してたった一人異国の地に在るのだ、淋しくもなるだろう。

「分かった。俺でなければお父さんって呼んでくれ。」

俺の返事を聞いた超は

「ありがとうお父さん!!」

とても嬉しそうに笑った。

15話

高音・D・グッドマンは従者の佐倉愛衣と夜中の警備に付いていた。彼女たちが森の中に踏み込んだ時、彼女たちは大量の光によって包囲された。

「愛衣！！早く学園長先生に連絡を！！」

「わかりましたお姉様！！」

光の数は普段自分達が相手にしている数を軽く越えている。

彼女たちは決して弱い訳ではないが、たった二人ではさすがに限界がある。

彼女たちはすぐさま学園長に連絡を入れ助けを求める。

連絡が終わると同時に光が消え、大量の化物たちが姿を現した。

化物たちはそれぞれ、刀や槍、それに弓といったさまざま武器を持っている。

連絡を入れはしたものの、麻帆良は人員不足なうえにかなり広い。助けが来るのは遅くなるだろう。

そして重要なのは、彼女たちが助けが来るまで生き残っているかということ。

高音は影を使い魔として操り、佐倉は得意の炎系の魔法で鬼達を倒していくが、相手の術者が多いせいで鬼の数は一向に減らない。

魔力は減っていき疲労も貯まっていく。

「愛衣！！後ろですわ！！」

高音がそう叫ぶがもう遅い。

佐倉が振り向くとそこには刀を振り上げる鬼の姿。

思わず目を閉じる愛衣。

しかし、いつまでたっても自分は生きている。

恐る恐る目をあけるとそこには大量の銃剣に貫かれている鬼の姿。

「なん・・・じゃ・・・これ・・・は・・・？」

銃剣の刺さっている所から煙が上がり、鬼は弾けて消えた。

そして飛んでくる大量の紙から現れた黒のロングコートを着て銃剣

を持っている男。

以前に麻帆良の魔法使いたちの前で犯罪者なら誰であろうと殺すと宣言し、学園長が止めなければ『闇の福音』と恐れられるエヴァンジェリン・A・K・マグダウェルとの戦闘を開始していたであろう男。

小野寺 響

「学園長から連絡があって来てみれば、まさか殺される寸前だったとはな。」

「貴様何モンや!!」

鬼は突然現れた響に怒りの声を上げる。

鬼の問い掛けに響は顔を狂気で歪ませ、

「侵入者であるテメエらは皆殺しだ！

そんな奴らに名前を教えた所で無駄だ！

分かったらさっさと死ねえ!!」そして彼は銃剣を放つ。

次々と放たれる銃剣は鬼や鳥族そして、術者を刺し貫き殺していく。

「ナメるなやあ！！」

銃剣で体を貫かれながらもかるうじて生きている鬼が響に襲い掛かるが、響は手に持った銃剣を振るい、鬼の首を切り落とす。

「どうした！この程度か化物共！！」

それなら時間の無駄だ！！自害でもしてさっさと死ね！！」

「ナメとつたらアカンでえ！！」

「ガキはほつといてかまわん！！全員でコイツを仕留めるんや！！」

それまで高音たちにも襲い掛かっていた鬼達が響に襲い掛かる。

「掛かって来い化物共！！皆殺しだ！！」

響は焦るどころか、顔をさらに狂気に歪ませ鬼達を迎えうつ。

迫りくる鬼の豪腕を銃剣で切断し、そのまま鬼を切り刻む。

離れた所から矢を射る鳥族や、苦無を投げってくる狐の面を被った妖女には銃剣を放つ。

放たれた銃剣は矢を破壊し、苦無を弾いて少しの減速もせずに相手に突き刺さる。

突き刺さった銃剣の柄の先端から煙が吹き出し、中に仕込まれている火薬が爆発して確実に命を奪う。

高音たちは目の前の光景が信じられなかった。

あれだけいた鬼達は一体も残らず殺され、その鬼達を召喚した術者たちは、ある者は銃剣で体を貫かれ、ある者は銃剣の起こした爆発により体が吹き飛び、またある者は体をバラバラに切断されて絶命している。

「どうして殺したのですか!？」

高音が響にそう叫ぶ。

立派な魔法使いを目指す高音にとって、たとえ敵とはいえ人を殺すことは許せない。

「こいつらは敵だ。理由なんざそれだけで十分だろう?。」

「しかし、あなたなら殺さなくとも捕らえることだって出来たハズです!!」

「たしかに捕らえようと思えば、捕らえることだって出来たさ。」

「ならばどうして!!」

響は面倒臭そうに舌打ちをすると、

「俺が来なけりゃ殺されてたような奴がゴチャゴチャとつるせんだよ。」

恐ろしく冷たい声でそう言った。

高音のさっきまでの勢いは消え、愛衣は恐怖で体を震わせる。

「負け犬は正義を語れない。ここはそういう世界だぜ。それでも正義を語るなら強くなるんだな。少なくとも俺よりは。」

そこまで言つと響は高音たちに背を向け歩き出す。

「それが無理なら俺が殺すより先に敵を捕らえることだな。いくら俺でも捕らえられている奴まで殺しはしないからよ。」

高音は悔しさで体を震わせた後、響の背を睨みつけると

「必ず強くなってみせますわ!!
あなたなんかよりもずっと強く!!」

そう力強く宣言した。

そぬ言葉を聞き響は足を止めるが、

「ま、せいぜい頑張るんだな。」

そう言ってまた歩き出す。

しかし、その顔はとても嬉しそうだった。

16話

SIDE 響

「俺は無力だ……。」

目の前の敵はあまりに強大。

折れそうになる心を何度も鍛え、何度も立ち向かいその度にまたやられる。

その度に次こそはと、自分を何度も騙し戦い続けてきたがもう限界だ。

俺が諦めかけたその時、

「諦めたらダメですよ、小野寺先生!!」

ネギ君の励ましの声が聞こえた。

そうだ！俺は一人じゃない！！

「ありがとうネギ先生。」

俺としたことがこんな所で諦めるところだった。」

俺はネギ君の方を向く。

ネギ君は目を逸らすことなく俺を見る。

「俺と一緒に戦ってくれるか？」

「はい！！最後まで頑張りましょう。」

俺は一人じゃない！

「俺たちの戦いはこれからだ！！」

「何勝手に盛り上がってんのよー！！」

まるで打ち切りのマンガみたいなセリフを言ったところで、神楽坂が吠えた。

「悪い神楽坂。ちょっと気持ちを切り替えてた。」

「バカで悪かったわね!!」

俺たちは学期末テストが迫っているので小テストを行い、特に成績の悪かった生徒た5人、通称バカレンジャーを放課後に再び小テストをさせたのだ。

ちなみにバカレンジャーのメンバーは、

バカレッド 神楽坂明日菜

バカブルー 長瀬楓

バカイエロー 古菲

バカピンク 佐々木まき絵

バカブラック 綾瀬夕映

の5人。

綾瀬は一発で合格し、他のメンバーも要点を詳しく説明した後、なんとか合格していった。

神楽坂にも何度も説明してやっているのだが、なかなか合格出来ない。

外を見るとだいぶ暗くなっている。

「だいぶ暗くなってきたから今日はこのへんにしようか。」

「はあ~~~~やっと終わった~~~~。」

神楽坂はそう言って椅子にもたれ掛かる。

「俺は小テストを作るから、神楽坂と同室のネギ君は神楽坂に勉強を教えてやってくれ。」

「帰ってまで勉強するのー！ー!?」

「当たり前だ。試験の日まで時間がないんだからな。満点取れとは言わないから、せめて赤点は回避してくれ。」

「わ、わかったわよ。」

そう言くと神楽坂は渋々だが納得してくれた。

「それじゃあ、ネギ先生。神楽坂のことは頼んだよ。」

「はい！任せてください。」

これなら大丈夫だろう。

神楽坂のことは任せて俺はテスト対策のプリントでも作るか。

時刻はもう12時になろうとしている。

プリントを作っていたが明日も早いし、今日はこのへんにしておくか。

片付けを終えて、寝ようとした所でドアのチャイムが鳴った。

こんな遅くに一体誰だ？

扉を開けるとそこにいたのは宮崎と早乙女だった。

「先生大変なの！！みんなが！！」

「助けてください小野寺先生！！」

二人は俺に助けを求める。

俺は焦る二人を落ち着けさせる。

「で、何があつたんだ？」

落ち着きを取り戻した二人を椅子に座らせ話を聞いた。

二人が言うには、21Aが最下位になるとクラス全員が小学生からやり直しという噂が流れているらしく、それを信じたバカレンジャーが図書館島にあるという『頭が良くなる魔法の本』を探しに近衛とネギ君を連れて行ってしまった。

二人は連絡係として地上に残っていたのだが、突然連絡が取れなくなってしまう、急いで俺の所まで来たらしい。

「みんなに何かあつたらと思うとわたし・・・。」

宮崎はみんなのことが心配なのだろう、目に涙を浮かべている。

「わかった。今から学園長に連絡してみるから待っていてくれ。」

携帯を取り出し学園長に連絡をとる。

数回のコール音の後、

「ワシじゃが？」

「小野寺です。報告したいことがあつて連絡しました。」

「もしかしてネギ君たちのことかね？」

「知っていたんですか？」

それでネギ先生たちは無事なんですか？」

「司書の人から連絡があつての、ネギ君たちは無事じゃ。」

「そうですか。」

ネギ君たちが無事でよかった。

「それと彼らにはしばらく図書館島に籠って勉強してもらつからクラスの子たちのことは頼んだぞい。」

「分かりました。それじゃあネギ先生たちのことはお願いします。」

そう言つて携帯をきる。

「先生、みんなは・・・。」

「みんなは無事だつてさ。」

それを聞いた宮崎はよっぽど心配だったのだろう、泣き出してしまった。

「みんなのことは大丈夫だ。
もう夜遅いから二人はもう帰りな。」

「それじゃあ小野寺先生、ありがとうございました。」

早乙女はそう言つてまだ泣いている宮崎を連れて帰っていった。

まったく、あいつら帰つて来たら絶対に説教してやる。

俺はそう心に誓って眠りに着いたのだが、

「小野寺先生！！ネギ先生たちが行方不明ってどういうことですか！！」

次の日、教室の扉を開けると同時に雪広に問い詰められる。

ちくしょう、コイツらがいることをすっかり忘れていた。

「ええ！？ネギ先生たち行方不明になったの！！」

「そういえば朝からバカレンジャーを見なかったよ！！」

「このかもいらない！？」

雪広をキツカケに他の子まで騒ぎ出した。

「ネギ先生たちのことは今から説明するから、少し静かにしてくれ。」

そう言つとさつきまで騒いでいたみんなはおとなしくなる。
聞きわけはいいんだよなこの子たちは。

「ネギ先生たちは図書館島に魔法の本を探しに行つてな、結局は司書の人に見つかつて罰としてテストの日まで図書館島でずっと勉強することになったんだ。」

「そうなんだ。」

「ずっと勉強つて大変だね。」

俺の説明にみんな納得してくれたようだ。

「魔法の本なんてある訳ないだろうに。」

そんなモン探しにいくか普通……ゴメン、このクラスは普通じゃなかったな。」

「先生それってどういう意味!？」

「普通じゃないってひどくない!？」

「うるせえ!!10歳の子供が担任の時点で普通じゃねえだろ!!」

沈黙が訪れた。

「クラスの何人かは身体能力がスゴ過ぎるし、絡繰にいたっては口ポットだよな!？」

「正確にはガイノイドです。」

「そこはどうでもいいだろ!！」

絡繰に訂正されるが、そんなことは関係ない。

「この際だからぶっちゃけるけど、俺は教員免許持っていないからな
!!」

犯罪者だから俺は!！」

「犯罪者とか関係ないよ!！」

「そうだよ!! 私たちはそんなの気にしないよ!！」

「お前たち……。」

こんな俺をみんなは受け入れてくれる。

「ありがとう……みんな……。」

目の前が滲む。

「それじゃあみんな。」

おとなしく勉強していてくれよ。」

「先生は授業をしないんですか？」

「ああ、これから行く所があるから。」

「これからって、どこに行くんですか？」

「どこって……裁判所。」

「……ダメ……！！」「」「」

みんなは叫ぶと同時に俺にしがみつく。

「離せ、お前たち！！」

俺は裁判所に行かなければならないんだ！！」

俺は力ずくで歩き出す。

「ちよっ！？なんで止まらないの!？」

「誰かこの人を止めて!!」

その時、銃声が響いた。

S I D E O U T

響は床に倒れ伏し、クラスメイトの視線は龍宮に集まっている。

その龍宮の手には銃が握られている。

「龍宮さん・・・それって銃だね？」

「まさか・・・本当に撃つたの・・・？」

恐る恐る尋ねる彼女たちに龍宮は答える。

「大丈夫、モデルガンだから。」

「『『『『『』』』』』』そういう問題じゃない!!!」

誰も納得しなかった。

「う……ん。」

そんな彼女たちの声により、響は意識を取り戻す。

「俺は急にどうしたんだ？衝撃を感じたと思ったら、目の前が真っ暗に……。」

いきなり撃たれたからだろう、記憶が混乱しているらしい。

「大丈夫かい小野寺先生？いきなり躓いて床に頭をぶつけて気絶しちゃってね。大丈夫そうだけど、念のため保健室に行ってみてもらったほうがいいよ。」

私たちはおとなしく自習をしているから、安心していいよ。」

「そうだったのか。」

それじゃあ、俺は保健室に行ってくるから、みんなは自習をしておいてくれ。」

「「「「「はーい。」「」「」」」」

どこか気の抜けた返事ではあったが、響は気にせず教室を後にする。

残された彼女たちの思ったことは、

（（（（（二度と教員免許のことに触れてはいけない。（（（（（

そして、

（（（（（龍宮さん超怖い。（（（（（

この二つだった。

17話

夜の麻帆良を二つの影が飛ぶ。

ひとつは真祖の吸血鬼であるエヴァンジェリンA・K・マグダウェル。

それを追うのは、ネギ・スプリングフィールド。

ネギは呪文を唱え、8体の風の中位精霊を呼び出す。

ネギの姿をした風の精霊はエヴァに突撃するが、エヴァはマントから触媒を取り出すとそれを精霊に投げ、氷の魔法で風の精霊を打ち消す。

そんな二人の戦いを響はつまらなそうに眺めていた。

響がこうしているのはネギが危険になった時、それを助ける為ではない。

むしろ逆、響はネギ・スプリングフィールドがエヴァンジェリン・A・K・マグダウェルによって殺されるのを待っている。

響は出来るだけネギの力になりたいと思っている。

だがそれは教師としてであって、魔法関係者として力になる気は全くない。

響は学園長との取り決めにより、エヴァが犯罪、もしくは一般人に危害を加えるまで手が出せない。

本来なら響はエヴァを殺していたのだが、それはタカミチによって阻止された。

響は一般人に危害を加えるようなことはしないが、自分の邪魔をするなら話は別だ。

この時も普通の魔法使いなら響はその魔法使いを殺した後、エヴァを殺していただろう。

だが、来たのはタカミチだった。

タカミチはかなりの実力者だが、響は相手がいくら強かろうと退いたりしない。

だが、タカミチはN G O 団体の『悠久の風』に所属し、多くの犯罪組織を潰している。

もしも、タカミチが死んだら今以上に犯罪者による被害は増えるだろう。

それでは意味がない。

だから響は学園長の提案を受け入れた。

もつとも、教師にされるとは夢にも思っていなかったのだが。

一度提案を受け入れた以上それを破るようなマネはしない。

だから響はエヴァが行動を起こすのを待った。

そして今夜、エヴァは行動を起こしネギと戦っている。

だがエヴァがネギを殺す様子はなく、さっきから逃げてばかりいる。

しかし、ネギはあらかじめ召喚していた8体の精霊に加え、新たに召喚した8体の精霊でエヴァを挟み撃ちにする。

エヴァは魔法でそれを魔法で迎撃するが、武装解除を喰らいネグリジェ姿になってしまった。

力を封印されて触媒がなければ魔法を使えないエヴァに、もはや勝ち目はないだろう。

ネギはエヴァを拘束するために呪文を唱えるが、あらかじめ近くに潜んでいた茶々丸に妨害される。

呪文の詠唱中はどんな魔法使いも無防備になってしまう。

無詠唱呪文というのもあるのだが、それは詠唱呪文に比べると威力は遥かに落ちてしまう。

だから魔法使いは従者と契約を結び、自分を守る盾として従者と共に戦うのだが、従者のいないネギは呪文を唱えようとするが茶々丸によってそれを阻止される。

それにもめげずネギは呪文を唱えようとするが、その度に邪魔をされ、最後は茶々丸に拘束されてしまった。

エヴァは血を吸う為にネギに近づく。

それを見た響の顔が狂気で歪む。

銃剣を取り出しネギが殺されるのを、今か今かと待つ姿はまるで獲物を目の前にした猟犬。

しかし、そんな響の期待は裏切られた。

ネギを心配して駆け付けた神楽坂の跳び蹴りによって、エヴァが吹

っ飛ばされたからだ。

エヴァは自分が不利と判断したのか、すぐにその場から離れる。

響はエヴァを殺すことが出来なかったがその顔は狂気に歪んだまま
で、コートから聖書を取り出すと勢いよき開く。

ページは勢いよくめくれていき、淡く光を放つ紙が大量に宙を舞う。

紙が響を包み込み、弾けると響はその場から消えていた。

SIDE エヴァ

私は茶々丸と家までの道のりを歩いている。

くそっ、あともう少しで坊やの血を吸えたものを。

それにしても力を封印されているとはいえ、魔法障壁は普通の人間
が破れるような物ではない。

だが、神楽坂明日菜はそれを簡単に破ってみせた。

ジジイの孫と同室ということは何か特殊な力を持っているのかもし

れんな。

「ずいぶんと情けない姿じゃないかエヴァンジェリン。」

その声は私たちのすぐ後ろから聞こえて来た。

振り向くことはしない。

どうせ奴の顔は狂気に満ちている。

しかし、最悪な時に最悪な奴が来た。

触媒もない今の状態ではコイツには絶対に勝てない。

いくら取り決めがあるとはいえ、それをコイツが破らないと言い切れない。

「おいおい、人が心配して駆け付けて来たのに、無視とはひどいんじゃないのか？」

「黙れ。貴様が私の心配などする訳がない。
無駄話をしに来たのならさっさと消えろ。」

「ずいぶんとお怒りのようだな。」

それもそうか、10歳の子供に服を吹き飛ばされ、女子中学生に跳び蹴りを喰らわされたんだからなあ。

こんな奴が『闇の福音』とは聞いて呆れる。テメエは本当に『闇の

福音』か？」

黙っていれば勝手なことを。

だが、ここで怒りを表に出した所でコイツを喜ばせるだけだ。

コイツを潰すのは封印が解けた後だ。

「私の本当の力は大停電の日になったら見せてやる。貴様を潰すのはその日だ。」

「いいだろう！テメエを殺すのは大停電の日、貴様の力が完全になつてからだ！！」

「やれるものならやってみろ。
その時が貴様の最後だ。」

沈黙が辺りを包む。

「俺はもう帰る。」

そう言う奴は私たちから遠ざかっていく。

「マスター。」

「心配するな茶々丸。」

私は最強の魔法使いで、お前の主だ。
あんな奴に負けたりしないさ。」

そう言って心配する茶々丸を安心させる。

小野寺響、貴様はこの私が必ず潰す。

18話

SIDE 響

今日も授業を終え、いつものように麻帆良を歩いている。

麻帆良に来てから日が浅い俺はまだ完全に麻帆良を把握していない。

麻帆良は魔法使いの拠点にも関わらず人手不足なため警備は少し手薄だ。

おまけに広大な土地のため、応援に駆け付けるにも時間が掛かる。

いくら学園長やタカミチさん、そしてエヴァンジェリンなどの実力者が多いとはいえ、大群で攻め込まれたら守り切れないだろう。

もつとも、魔法の秘匿を考えれば大群で攻め込むなんてことはまずないだろうが。

そんなふう歩いていると、子供たちの遊ぶ声が聞こえてきた。

声のする方へ行くと、そこは保育園でおそらく親の迎えを待っているであろう子供たちが遊んでいた。

足を止め、その光景を眺める。

みんな元気でとても楽しそうだ。

正直に言うと俺は子供が好きだ。

子供たちの笑顔はとても素敵で、見ているこちらまで笑顔になれる。

だからといっていつまで見ている訳にもいかないだろう。

子供たちを見て笑っている黒のロングコートを着た男。

怪し過ぎる。

しかし、このコートは絶対に脱がない！！

通報される前にさっさと移動するか。

そう思い保育園を後にしようとした時、

「子供がお好きなんですね。」

そう声をかけられた。

振り向くとそこにいたのは、3-Aのクラスメイトの那波千鶴。

「那波か、たしかに子供は好きだよ。」

みんなとても元気で見ているこっちまで笑顔になってくる。」

「そうですね。私もそう思います。」

俺の答えに那波は嬉しそうに笑う。

那波は笑っていたが、何か思いついたようで手をパンと軽く叩く。

「私、保母のボランティアで来たんですけど、よろしかったら小野寺先生も一緒にどうですか？」

ボランティアか……。

少し考えてみるが、やっぱり俺みたいな怪しい男を子供たちはきつと怖がるだろう。

やってみたいという気持ちはあるが、子供たちが怖がってしまうなら本末転倒だ。

那波には悪いが、断らせてもらおう。

「せっかくだけど断らせてもらうよ。

俺みたいな奴がいるとみんな安心できないだろう？」

「そんなことはありませんよ。

だって小野寺先生、とっても優しいじゃないですか。子供たちも怖がったりしませんよ。」

断りはするものの聞いてはもらえない。

「いや……そう言われても「やってみませんか、せ・ん・せ・い？」
な……。」

俺がまた断ろうとした瞬間に那波から放たれる膨大なプレッシャー。

勘とか経験じゃない、本能が俺に告げる。

コイツはヤバいと!!

「そ、そうだな!

せっかくだから俺も参加してみようかな!!」

慌ててボランティアに参加することを告げると那波からのプレッシャーが消えた。

「そうですか!

じゃあ、さっそく行きましょう!!」

そう言うとな波は俺の手を掴むとグイグイと引っ張っていく。

「どうして手を掴むんだ?」

「だって手を離したら小野寺先生逃げちゃいそうですから。」

那波は俺のことをあまり信じていないらしい。

「わかった。絶対逃げたりしないから、手を離してくれ。」

「本当に逃げたりしませんか?」

「本当だ。」

那波は俺をじつと見ていたが、
「わかりました。手は離しますから、絶対に逃げたりしないで下さいね。」

俺が逃げないとわかったようだ。

「それじゃあ早く行きましょう。」

「はいはい、わかりましたよ。」

俺と那波は保育園の門をくぐる。

「ちづるおねえちゃんだー！」

オカッパの女の子が勢いよく走って来て那波に抱き着くが、すぐに俺に気づいて那波の後ろに隠れる。

俺は女の子の目線の高さまでしゃがむ。

「こんにちは、俺は小野寺響。
よろしくね。」

「！？ 二、こんにちは。」

慌てながらも女の子はあいさつをしてくれた。

「あ、ちづるおねえちゃんだー！」

「こんにちは！ー！」

「ちづるおねえちゃんあそぼー!!」

ほかの子供たちも俺たちに気づいたようで集まってくる。

「ちづるおねえちゃん、そのおにいちゃんはだれ？」

子供たちの一人が俺に気付いたようで、尋ねてくる。

「俺は小野寺響。みんなよろしくね。」

「ひびきおにいちゃん、よろしく!!」

「ひびきおにいちゃんあそぼう!!」

みんな俺のことを受け入れてくれるようだ。

「みんな、おねえちゃんたちは園長先生とお話があるから、ちょっと通してね。」

俺と那波は園長先生のところまで行く。

もちろん子供たちはついて来たが。

「こんにちは園長先生。」

那波は初老の女性にあいさつをする。

「あら、子供たちが騒がしいと思ったら那波さん……そちらのかたは？」

「麻帆良学園で那波の副担任をしています、小野寺響といいます。俺もボランティアに参加したいと思うんですが、大丈夫ですか？」

園長先生は微笑み

「そうでしたか、それじゃあさっそくですがみんなと遊んであげてください。」

「わかりました、よろしくねお願いします。」

その後は那波と俺とで子供たちと遊んだ。

俺は子供たちを肩車をしたりした。

やはり、俺は着ているコートを子供たちに引っ張られて遊ばれたりしたが、絶対にこのコートを脱いだりしない！！

そんなこんなで子供たちと遊んでいたが、視線を感じたのでそちらを見るとオカッパの子が俺と那波をじつと見ていた。

俺が疑問に思っていたら、女の子はパツと顔を輝かせると

「ひびきおにいちちゃんとちづるおねえちゃん、パパとママみたい！」

とまあ、そんなことを言った。

「えーと・・・どういうことかな？」

いきなりこのことで頭が少し混乱している。

「ひびきおにいちやんがパパでね、ちづるおねえちゃんがママなの
!!」

うん、いい笑顔だ。

「ですって、あなた。」

「那波、お前は少しは否定しろ。
あと、あなたって呼ぶなよ。」

「いやだわあなた、那波じゃなくて千鶴って呼んでください。」

ダメだ、那波の奴は全く気にしていない。

「あのなあ那「千鶴って呼んでください、あ・な・た。」・・・。」

俺が那波と言おうとしたら再び放たれる謎のプレッシャー。

「わかった、千鶴って呼ぶ！
これでいいだろ!!」

「わかってくれたらいいんですよ。」

千鶴は納得してくれたようで、プレッシャーを消してくれた。

彼女は本当に中学生なのだろうか？

「あつ、パパだー！」

そんなやり取りをしているうちに、迎えが来たようだ。

「あら、今日は弐集院先生がお迎えですか？」

「やあ那波くん、こんにちは。

それに・・・小野寺先生もですか。」

弐集院先生はたしか魔法関係者だったはずだ。
ならこの子も魔法を知っているのだろうか？

いや・・・今はそんなことはどうでもいいか。

「こんにちは、弐集院先生。

千鶴にボランティアに誘われましてね。

みんな元気で俺もとても楽しかったですから、参加してよかったですよ。」

「そうですか、それは何よりです。
それじゃあ、僕らは先に帰ります。
今日はありがとうございました。」

「ひびきおにいちゃん！ちづるおねえちゃん！バイバイ！」

「バイバイ、気をつけて帰るんだよ。」

「また明日ね。」

女の子は手を振りながら帰っていく。

ほかの子供たちもみんな迎えが来たみたいだ。

「それじゃあ、俺たちもそろそろ帰るか。」

「そうですね、帰りましょう。」

俺と千鶴は園長先生にあいさつをして、保育園をあとにする。

寮までの帰り道を並んで歩く。

千鶴は俺の右側で微笑みながら歩いている。

「今日は誘ってくれてありがとう。
とても楽しかったよ。」

「いえいえ、こちらこそみんなと遊んでくれてありがとうです。
す。」

俺が感謝しているのに何故か千鶴にお礼を言われる。

「まったく、千鶴は優しいな。」

「あなたもとても優しいじゃないですか。」

千鶴は優しく微笑む。

俺にはあまりに眩しくて思わず目を逸らす。

「あらあら、あなた照れているんですか？」

「照れてない。あと、あなたって呼ぶなよ。」

反論するがあまり効き目はない。

「あら、私はあなたの妻だからいいじゃないですか。」

千鶴は何が悪いの？というように俺に尋ねる。

このままではなんかヤバイ気がする。

「あのな、夫婦に見えるってだけで本当の夫婦じゃないだろ。」

「私は小野寺先生なら別に構いませんけどね。」

ダメだ・・・コイツに何を言っても勝てる気がしない。

そんなこんなでいつのまにか女子寮にっていた。

「じゃあ俺はこれで。」

なんかあつたら管理人室にいるから呼んでくれ。」

「わかりました、それじゃあ小野寺先生また明日。」

千鶴はそう言つて自分の部屋に歩いていった。

今日はいろんな意味で疲れたからさっさと休もう。

SIDE 千鶴

私があの人を最初に見た時は、特になんとも思わなかった。

授業中も特に何もせずにみんなが騒がしくなった時にそれを静めるくらい。

だけど今日、保育園のボランティアに行った時に偶然小野寺先生がいた。

先生は子供たちを見て優しく微笑んでいて、先生が去ろうとした時このままじゃいけないと思った。

少し無理矢理だったけれど先生をボランティアに参加させたけれど、そうしてよかったと本当に思う。

先生はみんなに優しく接してくれたし、みんなも先生と仲良く遊んでいた。

まさか、夫婦みたいなんて言われるとは思わなかったけどね。

「ただいまー。」

そう言って部屋に入る。

「おかえり、ちづ姉。」

先に帰っていた夏美ちゃんが出迎えてくれた。

「ただいま、夏美ちゃん。」

「ちづ姉ごきげんだね。」

なんかいいことでもあったの？」

もしかしたら顔に出ていたのかもしれない。

「実はね、夏美ちゃん・・・わたし小野寺先生の奥さんになったの。」

「・・・えっ！？ちょっと待って！？ちづ姉が奥さんってどういうこと！？」

夏美ちゃんは呆然としていたけど、すぐに立ち直る。

たしかにさっきの言いかたじゃ、誤解を招くかしら。

でも、小野寺先生の奥さんか・・・それも悪くないかもしれないわね。

だけど、まずは目の前で慌てている夏美ちゃんの誤解を解いてあげないといけないわね。

19話

夜の世界樹広場に響はいた。

世界樹広場は世界樹という巨大な目印があるため、デート等の待ち合わせ場所によく利用される。

だが響が待っているのは友達や恋人などといった優しいものではない。

響が待っているのは、魔法世界において、『闇の福音』『人形使い』『不死の魔法使い』『悪しき音信』『禍音の使徒』『童姿の闇の魔王』などの様々な異名を持ち恐れているエヴァンジェリン・A・K・マグダウエル。

一体どれだけの魔法使いが信じるだろうか。

英雄であるナギ・スプリングフィールドですら罠を用いなければ勝てるかわからない相手に、魔力が無く、気を扱うことも出来ない、技術も経験も圧倒的に劣っている人間が、吸血鬼を相手に不意も討たずに真っ正面から戦いを挑もうなどと。

たしかに響には頭を撃ち抜かれても致命傷にならない程の再生能力がある。

だが、それも吸血鬼の真祖であるエヴァには遥かに及ばない。

それにも関わらず、響はエヴァに勝つ気にいる。

否、響はエヴァを殺す気にいる。

犯罪者には死を。

たとえ相手が誰だろうと、たとえ勝ち目が無かろうと、響は犯罪者を殺すだけなのだから。

『 こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。』

スピーカーから停電を告げる放送が始まる。

『 生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてください。』

ブツツと流れていた放送が途中で途切れ、町から輝きが消える。

町は暗闇に包まれ、あるのは月と星の明かりだけ。

そして、放送が終わり一分ほどした後、膨大な量の魔力の反応が現れる。

エヴァに掛けられていた封印が解け、魔力が戻ったのだ。

力の戻ったエヴァはほんの少しの迷いもなく、響に向かってくる。

響はエヴァとの距離が近づくほどに顔を狂気で歪ませていき、そして二人の距離がなくなった。

エヴァが響の正面に降り立つ。

「こんばんは、小野寺響。」

「こんばんは、エヴァンジェリン・A・K・マグダウェル。」

それはまるで街中で偶然出会った時のようなあいさつ。

だが、二人からは尋常でない量の殺気が放たれ、広場を包む。

眠っていた鳥たちが、草の影に隠れていた虫たちが我先にと逃げ出していく。

それは当然であろう。

ニゲロ、キケンダ、コロサレル、そう彼らの生存本能が告げるのだから。

沈黙が広場を支配する。

響は狂気の笑みで、エヴァは余裕の表情で互いを睨み合う。

そして一陣の風が吹いた時、銃剣が放たれた。

銃剣は風を切り裂き、地面を刳りながらエヴァに襲い掛かる。

対するエヴァは断罪の剣でそれらを弾くと、一気に距離を詰め、響の首を切り落とすべく断罪の剣を振るう。

響は身を屈めて断罪の剣を躲し、新たに銃剣を取り出しエヴァの喉と心臓に突き刺そうとするが、響が銃剣を突き刺すより早くエヴァの拳が響を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた響は地面を何度もバウンドして世界樹に激突する。

普通の人間ならこれで死ぬだろう。

しかし、響は首をコキコキと鳴らしながら何事もなかったかのように立ち上がる。

響が今だ戦えることを確認したエヴァは右手を上げ、氷の矢を出現させる。

その数は軽く100を越える。

響はその数に絶望するどころか喜びに顔を歪ませる。

エヴァの手が振り下ろされ、氷の矢が響に降り注ぐ。

響は銃剣を振るい氷の矢を砕きながら、エヴァへと突撃する。響の体は防ぎきれなかった矢や、砕いた矢の破片で傷を負っていくがその程度の傷、頭を銃弾で撃ち抜かれても死なない響にしてみれば無傷に等しい。

魔法の射手は無意味と判断したエヴァは氷の矢を出すのをやめると断罪の剣で響と真っ正面からぶつかり合う。

銃剣と断罪の剣が鏝ぜり合い火花を散らす。

そして、二人が弾かれたように距離を取る。

二人が戦っていた僅かな時間の間に広場の地面はいくつも刳れて、氷の塊が辺りに散らばっている。

だが、戦いはまだ始まったばかり。

「小野寺響！人間にしてはよくやるじゃないか！！だが、私の本当の力はこの程度じゃないぞ！！
どうする？降参するなら今の内だぞ！！」

エヴァが高らかにそう告げる。

エヴァは封印が解かれて力が戻っているものの、本気で戦ってなどいない。

もし、エヴァが本気を出せば響では相手にもならないだろう。

エヴァは響を試しているのだ。

自分を『闇の福音』と知っていながら、正面からたった一人で戦いを挑むこの男を。

響はエヴァの力を目の当たりにして諦めるどころか、

「本当の力はこの程度じゃない？だからどうした！！降参なんざする訳ねえだろ！！ゴチャゴチャ吐かしてねえでさっさとかがかって来い！！ハリー（早く）。ハリー（早く）！ハリー（早く）！！」

一歩も引かない。

エヴァの顔が驚愕に染まる。

だが驚愕はすぐに喜びに変わると、エヴァは嬉しそうに、楽しそうに笑う。

エヴァは勘違いをしていた。

小野寺響が自分に闘いを挑んだのは無知故だと。封印が解かれ、力が戻れば圧倒的な力の差を前に絶望すると。

だが実際はどうだ？

圧倒的な力の差を前にしても響は一歩も引かない。

「いいだろう小野寺響！！この私が全力で相手をしてやろう！！」

「上等だ！！かかって来いよエヴァンジェリン・A・K・マグダウエル！！」

テメエはこの俺が必ず殺す！！」

先程とは比べものにならない量の殺気と狂気が放たれる。

もはやこの二人を止めることなど出来ないだろう。

「マスター。」

再び殺し合いを始めようとした二人を操縦が止める。

「なんだ茶々丸、邪魔をするな。」

再び始まるうとしていた闘いを邪魔され、エヴァは少し苛立ちながら茶々丸を睨みつける。

「申し訳ありませんマスター。」

しかし、ネギ先生との約束の時間を過ぎていますが、よろしいのですか？」

そう告げられたエヴァは思わず固まってしまふ。

すっかり忘れていたらしい。

「それに早くしなければ停電が復旧してしまいます。そうなれば封印を解くことは出来なくなりますが……。」

「し、しかしだな茶々丸……。」

エヴァは気まずそうにチラチラと響の様子を窺う。

さっきまで殺し合いをしていたのにいきなりやめるなど出来ないだろう。

しかし、今夜封印を解かなければ今度はいつになるかわからない。

「約束しているんだろエヴァンジェリン。
俺のことは気にせず早く行けばいい。」

迷っているエヴァに響が声をかける。

「・・・いいのか？」

「闘いの最中に力が封印されても面倒だ。さっさと封印を解いて来い。まあ、お前が封印を解いた後は問答無用で殺すかな。」

広場を包んでいた殺気と狂気が霧散する。

「行くぞ茶々丸！！」

「失礼します、小野寺先生。」

エヴァが茶々丸を連れネギの元へ向かう。

「約束を忘れるなんて困ったお子様だ。
お前もそう思うだろ？」

「マッタクダナ。」

響が振り向くとそこにいるのは響の膝位の大きさの人形。

「これはかわらしいお人形だ。」

おまけに動いて喋れるとは、保育園の子供たちが喜びそうだ。」

たしかに動いて喋ることの出来る人形は珍しいから子供たちは喜ぶだろう。

もつとも、その人形が自分よりも大きいナイフを持ち、その小さな体からは考えられない量の殺気を放っていないければの話だが。

「ケケケ、オレハガキガ嫌イナンド。」

保育園ナンテガキノ集マル場所ナンテゴメンダネ。」

「おいおい、お前のご主人も子供だろ？」

子供が嫌いなんで、エヴァンジェリンが聞いたら泣いちゃうだろう。」

「ケケケケケ、ゴ主人ガソンナンデ泣クカヨ。」

マ、泣イタラ泣イタデ面白ソウダケドナ。」

「それもそうだな。」

もしもエヴァンジェリンが泣くようなことがあつたら呼んでくれ、面白そうだ。」

「ケケケケケ、気ガアウジャネエカ。オマエトハ仲ヨクデキソウダ

ナ。」

そんな場違いな会話をしている二人。

エヴァがこの会話を聞いたら間違いなくキレただろう。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺は小野寺響。お前は？」

「オレハチャチャゼロ。」

エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルノ一番最初ノ従者ダヨ。」

二人がようやく自己紹介を終える。

「で、エヴァンジェリンの従者が俺に何のようだ？」

「ゴ主人ガ帰ッテクルマデドウセ暇ダロ？」

何モシナイノモ時間ノ無駄ダカラナ。

ソレマデオレト遊ボウゼ。」

チャチャゼロはそう言うとな이프を構える。

「ご主人があだと従者は苦勞するな。」

響が銃剣を出し、広場に再び殺気が満ちる。

そして、二人が同時が動いた。

響は低い右手の銃剣を振るうが、チャチャゼロは飛び上がりそれを躲すと、体全体を使ってナイフを振り下ろす。

響は左手で持った銃剣でそれを受け止め、右手の銃剣をチャチャゼロに突き出すが、チャチャゼロは背中の中を翼を使い空を飛ぶ。

響は急に飛んだチャチャゼロに軽く驚くが、すぐにいくつもの銃剣を飛んでいるチャチャゼロに放つ。

衝撃波を起こしながら襲い掛かる銃剣をチャチャゼロは掠ることすらせずに躲すと、響の真上から勢いを着け、斬り掛かる。

響はそれを銃剣を交差し受け止める。

だが、勢いが着き威力の増した一撃に銃剣がたえられず、銃剣はたやすく碎ける。

もはやこれまでだろう。

チャチャゼロですら、自分の勝ちを確信したのだ。

しかし、響は楽しそうに顔を狂気に歪める。

ナイフが響の顔に突き刺さる直前、ナイフは大きく開かれた口によって止められた。

その光景に思わずチャチャゼロも動きを止めてしまった。

その隙を響が見逃すハズもなく、響はチャチャゼロの首を目掛けて銃剣を振るう。

チャチャゼロは思わずナイフ離し、なんとか銃剣を躲す。

「危ねえだろうが、もう少しで死んでたぞ。」

響は口にくわえたナイフを手に取ると、楽しそうに言う。

「ケツ、ソナ楽シソウニ笑ッテルクセニヨク言ウゼ。」

チャチャゼロは自分のナイフを奪われたからだろうか、少し不機嫌そうに言う。

「ああ、このナイフはお前のだったな。
ほらよ、受け止れ。」

響は機嫌の悪くなったチャチャゼロにナイフを投げつける。

「ヨカッタノカ、オレニナイフヲ返シテモヨ？」

チャチャゼロはあっさりと返されたことに少し戸惑いながらも、ナイフを受け取る。

「細かいことは気にするな、どうせ遊びだろ？」

まさかの答えにチャチャゼロは啞然するが、すぐに楽しそうに笑う。

「ケケケケケ、ソレモソウダナ。
ドウセ遊びナラ楽シマナイトナ。」

チャチャゼロは再びナイフを構え、響は狂気表情で銃剣を構える。再び殺し合いという名の遊びが始まろうとした時、広場に明かりが灯った。

「アアッ!？」

飛んでいたチャチャゼロが地面に落ちる。

「お前が落ちたってことはエヴァンジェリンの奴は封印を解けなかったんだな。」

「セツカク楽シンデタノニヨ。」

響が呆れたように呟き、チャチャゼロが遊びを中断させられたことに不機嫌になりながら言う。

「まあ、そう言ってやるな。
もしかしたら封印が解けなくて泣いてるかも知れないからさっさと行こうぜ。」

響は楽しそうに笑いながら銃剣をしまう。

「ダツタラ、ゴ主人ガ泣キ止マナイウチニサツサト行クゾ。」

「はいはい、わかりましたよ。」

響は少し呆れながらもチャチャゼロを掴むと、広場を後にする。

こうして停電の夜に、響とチャチャゼロの奇妙な友情が芽生えたのだった。

20話

SIDE 響

「お父さん、ちょっと付き合っただけで欲しいネ。」

年頃の娘は自分の父親を嫌う傾向がある。

そんな娘から誘いを受けて喜ばない父親がいるだろうか？

いや、そんな父親はいない。

父親と呼ばれているだけの俺でも嬉しいのだ、これが自分の娘ならその喜びはハンパないだろう。

しかし、それも時と場合が大切だ。

今、俺と超鈴音がいるのは3-Aの教室。

おまけにホームルームが終わりすぐに声を掛けられたので、クラスメイト全員がまだ教室にいるのだ。

俺たちが親子なのをみんなが知っているなら何も問題はない。

もっとも、そう呼び合うだけで実の親子ではないのだが、そのこと

を知っているのは四葉だけ。

他のみんなはそんなことは知らない。

今みんなが静かなのは嵐の前の静けさにすぎない。

さあ、今にも爆発するぞ。

はい・・・3・・・2・・・1・・・。

「「「「ええーーーーーお父さんーーーー!?」」」」

・・・ほらな。

「超と小野寺先生って親子だったの!？」

「奥さんが中国人だったとか？」

「そう言われたらあんまり違和感ないかも・・・。」

まずい、このままでは俺と超が実の親子としてクラスのみんなに認識されてしまう。

超を見ると嬉しそうに笑っている。

コイツわざとみんなの前で言いやがったな。

「おい、お前たち……。」

俺が説明しようとした時、

「あらあなた、娘がいるなんてどうして妻の私に言ってくれなかったの？」

さらなる爆弾が投下された。

再び訪れる沈黙。

ヤバイこれはさっきの俺と超が親子だったことが判明した時よりもさらにヤバイ。

超いたっては俯き震えている。

みんなが爆発する前に急いで説明しなくては。

「みんな聞いてくれこれには訳が「お……。」……お？」

説明しようとしたのだが、超の謎の呟きに思わず説明を止めてしま
う。

それにしても「お……。」って一体何なんだ？

そう疑問に思っていたが、

「お父さんの浮気者ーーーー！！」

その言葉と共に見事なアッパーカットが俺の顎に炸裂する。

まさかのアッパーカットを防ぐことなど出来るはずもなく、俺はそのまま宙を舞う。

俺はなぜ娘にアッパーカットを喰らわなければならないのだろう。

俺はそんな疑問を抱きながらそのまま意識を失った。

S I D E O U T

「お父さん！！那波さんがお父さんの奥さんってどういうことネ！！ちゃんと説明して欲しいヨ！！」

「超さん落ち着いて下さい！！響は意識を失っているんですから！！」

「そうアル超！！少し落ち着くヨロシ！！」

「あらあら。」

意識を失った響をガクガクと揺らしながら問い詰める超を葉加瀬と古菲が無理矢理引き剥がす。

「お父さんにそんなことをしたらいけないでしょ。私も一緒に謝るからお父さんに謝って。」

「那波さんがお母さんみたいになってるヨ!？」

千鶴がまるで超の母親のように超をなだめる。

「修羅場だ修羅場！楽しくなってきたね!！」

「楽しんでる場合じゃないですよハルナ。」

「そ、そうだよ。はやく小野寺先生を起こしてあげようよ。」

そんなやり取りが繰り返された後、ようやく響は起こされる。

「・・・なんで俺がこんな目にあわなきゃいけないんだ。」

気絶から目覚めた響は哀愁を漂わせながらそう呟く。

「そんなことよりどうして那波さんがお父さんの奥さんなのか説明して欲しいヨ!！」

「そんなことって・・・。」

理不尽なアップパーカットをそんなことで済まされ、響はさらになだれる。

「お父さんはやく説明するヨー！」

「はいはい、じゃあ説明するとだな。」

俺が以前に保育園のボランティアに千鶴と一緒に参加した時に、園児の子が俺たち二人を見て夫婦みたいと言ったんだよ。」

「なるほどね。」

「あんまり違和感ないよね。」

普通なら中学生と大人が夫婦に見えることなどまずないだろうが、千鶴はモデル顔負けのスタイルなので響と並んで歩いたとしても夫婦に見える。

「じゃあ、響先生と超は親子なの？」

「それは超のお父さんが俺に似ているらしくてな。だから、俺をお父さんと呼びたいんだと。」

「そうだったんだ。」

「じゃあ、仕方ないね。」

響の説明でみんな納得したようだ。

「それで超は俺に何か用があつたんじゃないのか？」

「特に用は無いけど、大好きなお父さんと二人でのんびりしたいと思ったらダメかな？」

超の目的は響と放課後をのんびりと過ごすことだったらしい。

なら何故、お祭り騒ぎが大好きな3ーAの全員がいる教室で響を誘ったのか疑問ではあるが。

「そうかい、じゃあ遅くならない内に行こうか。
みんなもあまり遅くならないようにな。」

「「「「「はーい。」「」「」」」」」

みんなの返事を聞き、響と超は教室を後にした。

S I D E 響

教室を後にした俺と超は途中に立ち寄った店で食事をして、最近あった出来事などを話たりしていた。

今は世界樹広場のベンチに座っている。

ふと疑問に思ったのだが、俺にそっくりだという超のお父さんはどんな人なのだろう。

「なあ、超。お前のお父さんってどんな人なんだ？」

俺は超にそう聞くんが、超は少し考えると、

「・・・鈴。親子なんだからやっぱり超じゃなくて、鈴って呼んで欲しいヨ。」

超は少し不安な顔で俺にそう言う。

「それもそうだな。」

じゃあ、鈴って呼ばせてもらう。」

鈴は少し笑って自分の父親について答える。

「私のお父さんは英雄だヨ。」

「英雄？」

「そう、私のお父さんは英雄ネ。」

迫り来る敵兵をちぎっては投げちぎっては投げ、近づく敵は片っ端から真つ二つ。

最後は全身に爆弾を括り着けて敵の戦艦ごと吹き飛んだヨ。」

「いや、嘘だろお前。」

いくらなんでもそれはありえないだろ。

「・・・バレた力。」

「当たり前だ。」

鈴は笑っていたが、少し悲しそうな顔になる。

「それでも、私にとってお父さんは英雄だヨ。」

「・・・そうか。」

さつきまで楽しかった広場が嘘のように沈黙に包まれる。

「それに・・・とても馬鹿な人だったヨ。」

「鈴？」

思わず聞き返す。

「自分は人殺しだから幸せになつてはいけないうて言つてた。弱いくせにたった一人で戦つてた。

死ぬ時に何度も謝りながら死んでいったよ。

謝らきやいけないのは私の方なのに。

守られてばかりで何の力にもなれなかったのに。」

そう言つて鈴は泣く。

きつと鈴は悔しいのだろう。

自分を守るために傷つくお父さんの力になれなかった自分が。

俺は泣いている鈴を優しく撫でる。

「…………お父さん？」

「そう自分を責めるな。

お前のお父さんは幸せだよ。

こんなに自分のことを思ってくれる娘がいるんだから。」

「でも!-!」

鈴は納得出来ないのだろう、声を上げる。

「お前のお父さんである俺がこう言っただ。間違いないさ。」

「…………お父さん。」

鈴はまた泣きそうになる。

「ほら、泣かないで。

鈴には泣き顔より笑顔のほうがよく似合っただから。」

鈴は驚いたようだがすぐに笑う。

「やっぱりそっくりネ。」

お父さんも私が泣いたらよくそう言ったヨ。」

なるほど、似ているわけだ。

俺と鈴のお父さんとは気が合いそうだ。

「暗くなつて来たし、そろそろ帰るか。」

そう言つてベンチから立ち上がる。

「そうだね。帰ろつお父さん。」

鈴もベンチから立ち、並んで歩き出す。

「お父さん。」

「なんだ？」

鈴のほうを向く。

「ありがとう。」

鈴は笑顔で俺に言う。

やっぱりこの子には泣き顔より笑顔のほうがよく似合う。

「どういたしまして。」

俺はそんなことを思いながら笑顔でそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9768v/>

銃剣使いとしてネギまへ

2011年11月11日07時23分発行